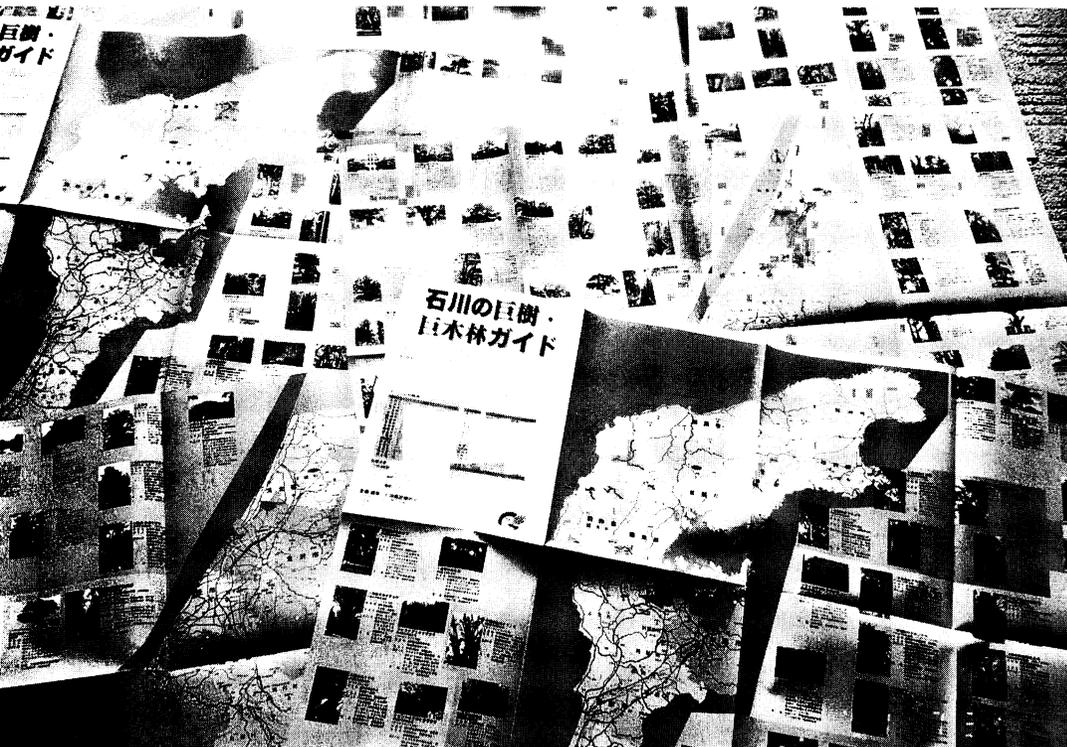


巨樹いしかわ

1998

No. 19

— 10周年記念特集号 —



石川の巨樹・巨木林ガイド

目次

表紙	巨樹・巨木林ガイド	1
会長あいさつ（創立十周年にあたり）	里見 信生	2
祝辞	石川県技監（環境安全部） 清水 靖夫	2
	石川県議会代表 大幸 甚	3
	ひたち巨樹の会会長 川上 千尋	3

十周年記念大会

講演（要旨）森林と環境と文化	北村 昌美	4
シンポジウム（要旨）		
巨樹と植生・文化・保護・探訪		6
十周年大会に寄せて	片木 進、神田 リエ	12
不肖の会員	木戸 睦彦	13
十周年大会に思う	宮本 康	13
十周年の活動を祝って	大野木潤子	14
十周年行事担当奮戦記	北川 正司	14

石川県巨樹の会十年の歩み	事務局	16
イスノキの巨樹	里見 信生	17
古里巨樹名木など覚書（14）	赤井 重恭	18

巨樹探訪

輪島市の巨樹を訪ねて	中島 康雄	20
探訪会に参加して	清水 睦子	22
石川県巨樹の会十周年記念の杜	事務局	23
秋季探訪会のお知らせ	事務局	23
輪島市指定天然記念物	事務局	24
巨樹だより・石川県巨樹の会日誌	事務局	26
平成十年通常総会の概要	事務局	27
巨樹の会の図書一覧表③	事務局	28

（題字 里見信生）

創立十周年にあたり

石川県巨樹の会会長

里見信生

今年が本会が発足してから十周年を迎えます。振り返ってみますと、今更ながら年月の経過の早さに驚きます。この間、着実に発展を続けて来ることが出来たのは偏に会員各位の御支援・御鞭撻によるものと、感謝申し上げます。

さて、本日、十周年記念大会を開催するに当り、その御案内を差上げましたところ、斯様に盛大な会となりました。県外からも、はるばるおこし下さいました方々のお顔をお見受致しますにつけても、御多忙のところ万障お繰合せご出席下さいましたことを厚く御礼申し上げます。なお、多くの方々から、お祝辞・お祝電・お祝品を頂戴致しましたことに心から深謝申し上げます。

只今、この壇上で、私は本会十年間の歩みが追想されましたが、「第三回巨木を語ろう全国フォーラム」の成功と「第十五回朝日森林文化賞」の受賞は吾々の会の名を全国に知らせることが出来ました。次の十五周年には会員各位と、どのような自慢話を語ることが出来るか楽しみです。それにしても、従前以上のお励ましの声を賜りますようお願い致します。ごあいさつとさせていただきます。

十周年を祝う

— 祝辞 —

石川県技監（環境安全部）清水靖夫

平成元年の発足以来、十年間にわたる石川県巨樹の会の精力的な活動に対して敬意を表しますとともに、本日の十周年大会の開催を心から御祝い申し上げます。

悠久の時によってはぐくまれた巨樹や巨木は素晴らしい景観の形成や、野生生物の生息の場となるなど自然環境の保全にとって大変重要な価値をもっております。また、信仰の対象や、地域のシンボルとして人々に安らぎと、潤いを与えてくれます。

巨樹や巨木は県民のみならず、地球の財産だと思っております。このような貴重な財産である巨樹や巨木林を守り、後世に残そうと里見会長をはじめ多くの心ある方々が集い、全国に先がけて石川県巨樹の会を発足させ、この十年間、巨樹の調査、あるいは探訪会の実施、後継木の育成など様々な活動を継続してこられました。

特に、平成二年春には「巨木を語ろう全国フォーラム」が石川県と加賀市、石川県巨樹の会の三者が協力して実施しました。全国から巨樹に関心の深い人々が集い、啓蒙活動の推進、各県での巨樹の会作りなどを提唱し、全国に発信しました。そして、こゝで播いた種が全国各地で芽吹き、平成五年秋には全国巨樹・巨木林の会の発足につなが

りました。全国的な巨樹の保全活動を推進するために大きな役割を果たしてきたと思います。

また、活動としては奥市町村における天然記念物指定の促進などは積極的な巨樹の保護策の実施にもつながります。白峰村の太田の大トチは平成五年に国指定天然記念物になりました。平成八年には日本一のカツラ。平成九年には県一位のミズナラなど新しい巨樹の発見もありました。

このような活発な活動が全国的にも高い評価をうけて、平成九年には「朝日森林文化賞」という素晴らしい受賞に結びついたものと考えております。

巨樹を後世に守り伝え、巨樹の関心を高めようという石川県巨樹の会は、皆様の御努力で着実にその理解者を増してきたと思っております。

今後も巨樹を通して、本県の自然環境の保全に全力を尽していただきたいと思います。石川県巨樹の会の今後のさらなる御活躍、御発展を祈念いたしまして十周年大会にあたりましての御祝の言葉とさせていただきます。

巨樹いしかわ

平成10年8月1日

— 祝辞 —

石川県議会議員 大幸 甚

石川県議会を代表いたしまして、十周年記念のお祝いを申し上げます。私は、この十年間、創立からの会員であります。

個人といたしましては、自然保護につきましては、極めて共感するところが若い時からございました。家内が、里見先生の教え子であるという関係もあって、先生と公私共にお付き合いをさせていただいております。

今日、皆様のお手元にございます十周年を記念して作られました「石川県の巨樹・巨木林ガイド」を見まして、樹木の大きさ、太さ、歴史的なもの、それらにまつわる多くの民俗的なものも中心にあるのではないかと思っております。

例えば、金沢市宝町にある「百々女木のマツ」ですが、どれだけの多くの人が観賞してきたか。政財界のどんな方々がこのマツを見て感激されたことかと想像をたくましくします。

神社、仏閣にあるそれぞれの樹木は、各々民話を生み、歴史的な色んなものを形づくっているのではなからうか。

— 祝辞 —

ひたち巨樹の会会長 川上 千尋

無論、大きさも大事ですが、樹木の風格と歴史、伝統をふまえ、作家や写真家の協力を得て、役員の皆様、会員の皆様とでも作ってもたら幅広く楽しいのではないかと思いました。

なぜかと申しますと、私の住んでいるのは加賀市大聖寺でありまして、同郷の出身であります深田久彌が、山に関する名著といわれる『日本百名山』を残しております。

山については、「姿、形だけではない、そこにおける歴史的、宗教的、神話的ないろんなものが入っているのが百名山である」ということを述べておられます。樹木も正にその通りであると考えております。

私は、来る七月二十四日に、石川県山岳協会が三十周年記念事業として、ヒマラヤに植林をとのことで募集があり、私も家内と参加したいと思っております。

新らたなる飛躍を、皆様と共にやっていかなければと考えております。一言、御祝と期待をこめまして、御挨拶にかえさせていただきます。

茨城県日立市に「ひたち巨樹の会」という会があります。ひたち巨樹の会は「ひたち」とカナで書くのでありますが、これは日立市ばかりでなく、往時、茨城県を常陸国ひたちねという表現をしておりましたところから、ひたち巨樹の会ということでやっております。

この森の都金沢は、本多の森をはじめとして、この梅雨空の下、緑豊かに繁茂する樹々に心に安らぎを覚ええました。

また、当地は、私にとって関係の深いところがあります。今日、高校時代の友人が会場にお見えです。金沢大学でドイツ語の教授をやっております。

また、私の教え子も里見先生の植物分類学を専攻いたしました。今は茨城県の有能な人材として、若さにあふれ、前途洋々たる学者、教育者として立派に生長いたしております。これも先生の教えがあったのもので感謝申し上げます。

数年前には、ひたち巨樹の会一行がこの地を訪れました。そして、会

長はか関係の方々のお世話になって白峰村の太田の大トチを見ることが出来ました。その思いは今までも数十名の会員の心の奥に「木霊」という一つの心となって活動を地道ながらやっております。

そのような意味で、石川県巨樹の会とのつながりは深こうございます。全国で十ヶ所くらい巨樹の会が出来ているようですが、今後は、各巨樹の会との連携をとりまして、ますます緑豊かな環境として、豊かな人生が送れるような気持で活動してまいりたいと思っております。

今日は、記念大会ということでここに集まられたということは、真におめでたいことで、本当にわくわく、どきどき、胸おどらせて茨城の方から参った次第です。

皆様の今後の御健勝と益々の石川県巨樹の会の御発展を祈念して御挨拶にかえさせていただきます。

ひたち巨樹の会

事務局 日立市若葉町二一五—七

(樋口正雄方)

講演要旨

石川県巨樹の会十周年記念大会

森林と環境と文化

山形大学名誉教授 北村 昌 美

一、はじめに

自然と人間の共存が今日ほど重視される時代はない。しかし観念的に共存を唱えても、実際にどうすればよいかとまどうばかりである。それどころか、人間はますます自然をないがしろにし、自らにはね返ってくるとも知らず、破壊行為を続けているのである。今この状態を反省し、真の共存の道を探らなければ、おそらく後世に大きな悔いを残すことになるであろう。

そこで、今回は多少回り道のようにあるが、人間と森林の関係をあらためて見直すことから始めてみたい。

二、人間と森林の歴史

人間ははじめどのように森林を意識していたであろうか。おそらくそれは「恐れ」の気持ちとそれに伴う「畏れ」の思いであろう。またそういう思いを抱かせるにふさわしく、森林は奥深く不可解な所だったにちがいない。このこと立証するような

例は世界の各地に見られる。

しかし、次第に人間の居住空間が広がり、消費的な生活が一般化するにつれて、森林に対する人間の意識は「畏れ」から「恩恵の享受」へと移っていった。ただし、当初は森林を破壊するといった行為も少なかったと思われる。著しい森林の破壊をもたらしたのは弥生時代以降の農耕地の拡大である。ヨーロッパでも十四、十五世紀のころまでは開墾によって著しく森林が後退した。ただし、日本とヨーロッパでは農業の方法が異なるので、そのころから両者の自然景観に大きな違いが生まれるに至った。

農地の拡大よりも決定的だったのは、工業や鉱業による森林の破壊である。建築用材や造船用材の需要もまた急速に増大したので、先進国ほど森林の破壊と後退が進んだ。中でも地中海沿岸の諸国は、降水量不足のために今もなお森林の復旧が困難な状態である。

森林の破壊は回復への意欲を生む。中部ヨーロッパ、特にドイツでその

動きは著しく、やがて体系的な科学としての林学が生まれるに至った。

一方、十七世紀の西欧に起こった近代科学を根拠として、森林を人間の操作できる対象とみなした森林経営の思想が生まれた。日本人の自然観が、自然との一体感を根底においているのに対し、西欧では自然を人間の下におくという思想が一般的であった。そのもとで生まれた森林経営の思想を、これまで日本は受け継いできたのである。

三、森林の価値

これまでの森林経営の思想は、森林の木材生産機能に基礎をおいている。しかし、木材生産機能以外の効用に気づいたのはそう古いことではない。そのうち主要なものはいわゆる公益的機能であって、わが国でもすでに徳川時代に今日の保安林の原形ともいえるべき制度が生まれている。現在は、全保安林の約三分の二を占める水源涵養保安林をはじめとして、土砂流出防備保安林、防風保安林など、全部で十七種類の保安林が指定されている。それらはわが国の森林面積のほぼ三分の一に相当するのである。

森林の価値は木材生産機能や公益的機能にとどまらない。今日われわれが認識しているだけでも、保健休

養機能や文化的機能がこれに加わるのである。ところが、公益的機能は人間が特に要求しなくても、森林自体がいれば勝手に発揮してくれるのに対し、保健休養機能や文化的機能は人間が要求しないかぎり発揮してくる訳ではない。したがって、人間と森林の関係の神髄とでもいうべきものは、実はこれらを総括した文化的な側面にあると考えるべきであろう。人間の方に文化的な用意がないかぎり、森林は何も応えてくれないのである。

自然観や森林観の内容が深まり、生活文化の中に自然や森林が多く取り入れられていくにつれて、森林の意義は当然大きくなるであろう。こうして発掘していけば、森林の価値はおそらく無限に増大するにちがいない。その意味では、たとい専門家であっても、真の森林の価値のほんの一部しか知らないと言ってしまうであろう。そこでまず日本人の自然観と森林観に迫ってみることにしたい。

四、日本人の自然観

日本人の自然観の特徴として従来よく知られているのは、自然との一体感である。もともと日本人は自然を認識できる対象とは考えていなかった。そのため、現在の意味の自然を

表す名詞は「やまと言葉」にはなかったという。自然が現在のような意味でとらえられることを知ったのは、明治になって西欧の近代科学が導入されて以後のことである。

日本人の自然観のもうひとつの特徴は、四季の変化をはじめとする自然界の現象に、鋭敏な感受性を持っていることである。この繊細さは今も薄れておらず、日本の伝統文化の中に受け継がれているのである。しかし、生活の自然離れが進むにつれて、繊細さにもかげりが見え始めたのもまた事実であろう。

一方、もともと日本には育っていなくて、西欧の文化の中に早くから定着していたのが風景を見る目である。これには自然と一体という日本人の自然観がおそらく影響しているのである。日本人は風景を横から突き放して見ることをせず、つねに風景そのものの中に没入していたといえる。その結果、西欧では風景を眺めることが日常の楽しみの中に加えられるようになったのであろう。森林や牧草地を歩きながら風景を楽しむという散策やハイキングが、ヨーロッパ人の生活文化の中に取り入れられているのである。それに比べれば、日本人は風景に対してはるかに無関心である。日本で林内の散策や、いわゆる森林浴がなかなか定着しな

いのも、その辺に理由があるのにはない。



講演会場

五、生活文化の問題

西欧にはもともと森林浴という言葉はないが、それは林内に入ることが少ないからではなく、実際はまったくその逆である。あまりに日常化して、そのため特別の言葉を必要としないというのが真相であろう。森林浴というのは、森林に入りたがらない日本人を林内に誘いこむために造られた概念とも考えられる。しかもそれは健康のためによいからだという。西欧の人々ももちろん健康を意識してはいるが、それと共に風景を見る楽しみがあることを忘れて

はならない。

林内の散策のために森林はどこでも人里の近くになければならず、風景を美しくするために、森林は美的に配置されていなければならない。そのために森林はいつでも風景の主役であり、また日常生活そのものの主役なのである。それに対して日本の森林は、わずかに「山紫水明」の中の「紫」の部分を受け持っているだけで、いわばほんの脇役にすぎない。西欧でさかんなグリーンツーリズムも、西欧の人々のこういう生活文化を背景にして成り立っているのである。

風景の重視は、西欧の森林経営にも反映している。かつてドイツのパールデン・ビュルテンベルク州の森林経営規定に、「森林は文化的景観の不可欠の要素」という表現が見られた。森林を欠いた文化的景観などは考えられないのである。

六、森林に対する畏れ

人間と森林の関係の中で、かつては最も大切であったはずの森林に対する畏敬の念は、近代科学の導入以来ほとんど触れられることがなかった。しかし今や近代科学は反省を迫られている。それは森林と人間の間にある心の問題を無視してきたからにはかならない。世の中のあらゆる

現象が、合理性・普遍性に裏打ちされているようでありながら、むしろそうでない場合が多いことに気づくべきだったのである。例えば、同じ風景に接したとしても、そこがふるさとであるかどうかによって、人はまったく異なった感慨を抱くにちがいない。それなのに、このような心の動きは、近代科学ではむしろ邪魔者扱いでさえあった。

自然に対する畏敬の念をさらに具体化したのが自然宗教であろう。日本にも、巨樹、巨岩、水の流れなど、自然界のあらゆる存在の中に生命を感じ、それらと人間の内面が呼応するところに生まれたという修道道がある。ヨーロッパでも、キリスト教以前の宗教であったドルイド教の場合、同じようにあらゆる自然物に神を感じたという。しかもドルイド教の名残は、現在でもヨーロッパの至るところに見られる。かつて行った住民の意識調査でも、自然の中に霊を感じたという回答はヨーロッパでも予想外の高率を占めていた。ドイツでも四十％以上、フランスやフィランドでは六十％を超え、むしろ日本を上回っていたのである。

「あなたは、大きな古い木を見たときに、何か神々しい気持をいただきますか」という質問に対する回答でも、ヨーロッパの人々は日本人と比

べてけっして見劣りしない。すなわち、フィンランド人の九十%以上、ドイツ人の九十%近くが「いだく」と答え、日本人の数値をわずかではあるが上回っている。「いだく」という回答の少ないのは東京で、六十%弱、次いでフランスのナンシーが七十%弱という数値を示している。

ヨーロッパはキリスト教社会だと言われる。しかしよく見れば、日常生活の中に色濃くかつての多神教の名残をとどめている。謝肉祭の仮面の行列はかつて森に住んでいた神々だし、邪悪な冬に替わって訪れる春のために「五月の木」が町ごとに立てられる。キリスト教で最も大切なクリスマスも、もともとは冬至の祭なのである。また、いわゆる妖精という形で残されている昔の神々も少なくない。

七、おわりに

日本人と森林との交流はまだまだ密接ではない。今必要なのは森林との一体感の回復である。そのためになすべきことは、おりを見ては森林を訪れることであろう。条件は決して満たされていないが、その努力はしなくてはならない。

その一方、林業の不振にも目を向けるべきであろう。これもまた従来の林業の延長線上で打開策を考えて

も、おそらく活路は見出せぬものと思われる。木材生産以外の森林の価値、しかも未知の価値までを含めて、国民全体の責務を問うべきであろう。一人一人の国民にとっては、何よりも環境としての森林が大切なのである。自分は森林浴をしないからなどと行って、責任を回避することは許されない。

森林を愛護すべきだという世論の高まりの中で、声高に語られているのは「自然との共存」である。しかし、西欧の科学の教えるところに従って自然を人間の下に置き、自ら自然の生態系から離脱した人間が、いまさらそうは言えないはずである。自然をいたわろうとか、環境に優しくとかいう表現にすでに無理があるといふべきであろう。護られたわられているのは人間の方なのである。結局人間のできることは、自然に対して謙虚な姿勢を保ち、何とかして自然との間に折り合いをつけることであろう。将来の森林の活路も、おそらくその中で見出されるにちがいない。

◆主な著書

- 『森林と文化』、『シュヴァルツヴァルトの四季』、『森林と日本人』、『森を知ろう森を楽しもう』、『ブナの森と生きる』等

十周年記念大会 シンポジウム

- 巨樹と植生 芦原 孝治 (元県立高等学校教諭)
- 巨樹と文化 北村 昌美 (山形大学名誉教授)
- 巨樹と保護 松枝 章 (石川県職員・樹木医)
- 巨樹と探訪 渡辺奈利子 (能登中居博物館)
- 司会 石原 周次 (副会長・会社役員)

— 敬称略 —



司会

石原 会場の皆様 そしてパネラーの方々の協力を得て有意義な会にしたいと思えます。

先程、北村先生のお話の中で、日本人の自然観とヨーロッパ人の自然観には何となく共通点があるのではないかと、というお話をお聞きいたしました。

巨樹は何も喋らない。むしろ、こちらから語りかけないと答えてくれないところがあります。巨樹の会の皆様は、いつも巨樹と会話しておられる方ばかりです。今日は会報「巨樹いしかわ」の中に、巨樹との交流についてしばしば書いておられるお



巨樹と探訪

三方と、先程、記念講演をされた北村先生に加わっていただき、巨樹について語っていただきたいと思えます。まずは、右側の渡辺奈利子さんからお願います。

渡辺 私は現在、鳳至郡穴水町の「能登中居博物館」という町立資料館に勤務しています。

自然保護、環境問題についての専門分野で学識豊富な諸先生と同席させていただき、光栄に思っています。私は、「巨樹と探訪」というテーマをいただきました。訪れた樹木は

僅かですが、その時の雑感を含めてお話をさせていただきます。

学生時代から山登りを始めました。動機は、登山に参加すると体育の単位が一度に四単位ももらえるからという非常に情けない単純な出発点でした。しかし、一度の体験で山にのめりこんでしまいました。

山の空気、頂上に登った時の達成感は何ものにもかえ難く、あの透明感のある精神状態は経験のある方ならうなずいて下さると思います。

春は沢登り、夏は岩、秋はまた沢登り、滝など、冬は氷壁といった具合に週末はいつも通っていました。けれども現在は、困難な岩や雪山から一転して、のんびりと山と向いあうようになりました。

今でも忘れることがない四年前の出来事です。長野、岐阜県境の安房峠の入口の米糠山でカツラの木に出会った時のことです。それが巨樹に関心を持つきっかけになったのです。

山にはブナも沢山ありましたが、カツラの木の群生している辺りだけは、何か他と違う静謐なもの、深いもの、まるで悟りの道に入ったかのような一瞬摩訶不思議な気持ちになりました。上を見上げると葉の旺盛な繁茂で空が小さな天窓のように見えるんです。本当に今まで感じたこと

のない世界でした。

皆さんは如何でしょうか？ 私はそれまでは山に木があるのは当たり前だと思っていました。麓の木、中腹の木、山頂付近の木々はそれぞれ違っていて、皆んなきちんと、その場所に適応して生きているのだという程の感覚でした。

けれども、この様な印象的な森に入ってから、一体どうすればあのような気持ちになれるのかが知りたくて、関心も深まり、機会があれば探訪するようになりました。

福島県から新潟県への道で若松街道というところがあります。その街道沿いの三川村にある將軍スギ(全国二位)をはじめて見た時、これは遺跡ではないかと思うほどでした。

石徹白の大杉(岐阜県)などは、風格とはこのようなものかも知れないと感じました。信仰の山、白山の美濃登山口に位置し、長年の星霜にもめげず、畏れ、そして崇めたくなるような第一級の巨樹でした。

岐阜県高山市の臥龍桜、福井県大野市専福寺の大ケヤキ、本県山中町の栢野の大スギ、白峰村の太田の大トチ等々、まだ色々印象的なものも多くありますが……。

兎角、樹齢の高いものはそれだけで遺跡ですね。文化的遺産です。感想も何も、そこにあるだけで説得力

があります。

このほかに、巨樹ではありませんが青森県下北半島でヒバの埋没林を訪れたことがあります。四〇〇年前の大津波によって、美しいヒバの原生林が消失したのです。まさしく「消えた」と思う外ないところですが、枯れて砂地に埋もれているヒバが微かにかつての存在を伝えているかの様でした。

人工的な破壊でなく、自然の大きな力によって引き起されたところなのです。今はマツ林となり、往時の不幸な災いを知らぬかのように静寂な気配が感じられます。

私の探訪の一端を聞いていただきましたが、樹は環境や地形によって様々な姿をしています。例えば、豪雪地で生きている木々は壮絶な形をしているし、原生林の中で樹間がないところでは合体木として支え合い、絡まって生きています。そして、自然淘汰されて枯死したものは、森のエネルギーに変っていきます。

そのような光景を目にする時は、神社やお寺で管理された御神木も崇高であるが、人目につかず、なすがままに生きている巨木にはとても惹かれ、虜になってしまいます。もう一度会いたいと感じる樹です。遅しさ、しなやかさ、風格というものは一朝夕に出来るものではあ

りません。置かれた環境や今日までの過し方、それらの積み重ねが形であり、結果なのです。人の手も、顔も暮し方、考え方がよく現われるのと同じかも知れません。

とにかく、私が巨樹・巨木に会いに行くのは、何か自分を見つめたり、確かめる行為なのかも知れないと最近は何に思っています。何かとつもの大きな広がりや、景観そのものより、大きな営みの中にある生命の一点に触れたというか……。それは、一本の巨木だったり、溪流の中の一つの岩がより自然と向きあっている実感がします。

大袈裟かもしれませんが、巨樹は形になって目で確認できる神仏のような存在だと思っています。だってあんなに威風堂々と呼吸し、樹の側にいる一瞬だけでも満たされ、心が素直になれるのですから……。

幼い頃、積木で遊び、木造校舎で木の机、椅子、鉛筆などほとんどが木の温もりをもち、その中で暮してきた喜びが、私の行動の原点になっているとも言えそうです。それに私達の先祖も自然の中で生き、そして自然より多くの恩恵を受けてきたことに、私達も改めて再認識すると共に感謝したいと思っています。

最後に大好きな司馬遼太郎氏の言葉に「自然は不変の価値である」と

あります。これは小学六年生の教科書にあった『二十一世紀を生きる』という文章の中の言葉です。

まさしく不変の価値は森であり、そして森を崇める精神が子供達に広がっていくことを期待し、これらが私達に与えられた仕事だと思っています。

巨樹の会を通じて、趣意に基づきながら、自分の歩み方を背骨の部分で確認していこうと思っています。

石原 木が呼んでいる。恋人に会いに行く。一方で自分自身を木に見るというお話は、心豊かな人にそれ相應な答が返ってくるというのが巨樹でなかるうかと思いました。

次に、松枝さんお願いします。



巨樹と保護

松枝 私が、林業関係にかゝってきたのは小学校二年の頃からです。虫が飯より好きな昆虫少年でした。それが高じて、虫が食べる木を調べてみたいということから、県の方へ採用をお願いして県林業試験場へ入っていた次第です。

このような経緯で、虫が好きなことは人に劣らず、今も変らぬ少年の



司会者とパネラー

ら少々話してみたいと思います。まず、公園等の公共施設についてですが、責任がどこにあるか、管理体制が充分といえないようです。それは、責任管理者の移動に左右されて、継続的な管理が出来ないということです。技術的管理が足りないように感じることが往々にあります。

次に、経済上の理由でしようが、駐車場に貸しておられることが多いようです。一台でも多くの計算からか、木の根元近くまで駐車場にとつてある例が見受けられます。下手な運転手になるとぶつけるという不始末もでたり、又、アイドリングをするため、暑い排気ガスが出て、木を傷める現実も目にしています。

広い場所では、除草が大変な作業なので、除草剤を使って管理している例や、木の下で草やゴミを燃やして処理している例があります。考えねばならぬことだと思います。

山林等については、台風十九号で大木が被害をうけ、入山が少なくなりましたが、盗伐の被害がみられます。宝達山では、キハダの皮を剥ぐ行為があり、見るも無残なものです。所有者でないものがやっていますが、当事者が行っているものと感違いして見逃すのが現状です。そのような

点から見ると、やはり、山をまわって管理することが大事なことであると思っています。

今度は、技術の面について話を進めたいと思います。

下刈機にナイロンコードを使ったものがあります。これで樹木の根元を刈るわけですが、ナイロンコードは目に見えず、樹木の根元の樹皮を削ってしまう恐れがあります。そうしますと、その部位より病原菌が入りこむという現実を目にしています。昨夏、金沢市内で倒木の調査をしましたが、そこに菌が入り、腐朽して倒木したという結果がでていました。

氏子や檀家の寄進によって、建築物の屋根が銅板葺となっていて、銅が腐食する緑青が、雨水等により地表に流れ、樹木の根元のスギゴケを傷めたり、銅に弱い植物を傷めつけるということがあります。美観だけでそのようなものを使うのは不意なことで、適切な排水設備を伴って行うことが必要とされます。

保護技術の勉強不足も目につきます。例えば、腐朽部位をバーナーで焼く人がいますが、このようなことは熱によって形成層が破壊されて致命傷になる恐れがあります。傷口にトタンをかぶせる方法が行われていますが、最近では、内部が蒸れるとい

うことが解ってきました。また、肥料は、良かれと思って沢山やっておられる方もありますが、肥料のやり過ぎはかえって成長を悪くすることさえあります。

また、木柵で保護されているのは良いのですが、根元近くだけが行われています。木にとって一番大切なのは、枝の先の下部にある根です。その根が一番大切で、栄養分、水分の吸収が行われるところです。その部分を保護するようにしなければなりません。

次に、一般の人々の樹木に対する関心、認識を高めるため、天然記念物等への指定は良い方法で、今回、発行した「巨樹・巨木林ガイド」も役立つのではなからうかと思えます。今後、巨樹の会で新しい知識に基づいた定期的な観察、調査等を行い、適切なアドバイスができるシステム作りを考えなければと思えます。

長い目では、自然史博物館の実現が大きな力になるものと思えます。

資金の面で、少し触れてみますと、ご存知の通り、国、県市町村の天然記念物には、それぞれの管轄より補助がでています。金沢市では、保存樹として指定して、保護費用の助成をしています。また、県では、基金を設けて対応している場合もあります。

おわりにあたって、次のように将来を考えております。

大きな木を育てることも大切ですが、近い将来、大木とならんとする後継木を育てることも必要だと思っております。また、子供には、感受性の強い時期に、自然に触れる、触れさせる、それが樹木を愛する心の基本となることと考えております。

石原 保護対策について技術的問題から教育面にわたってお話がありました。樹木の管理について、フランスでは工業規格のようなものがあり、その技術標準を守らなければいけないのですが、日本では未だそうした技術標準がありません。早急な規程が望まれます。

次は、北村先生お願いします。



巨樹と文化

北村 石川県巨樹の会とは不思議な縁で結ばれています。事務局の田中さんは卒業生。また、会報「巨樹いしかわ」を拝見しますと、兵庫県篠山町の磯宮八幡神社へ国指定天然記念物のハダカガヤを調査にいられます。この神社の脇にある小学校が私の母校です。その母校の後輩である神社の息子が金沢の旧制第四



シンポジウム会場

高等学校の出身であるという不思議な御縁で結ばれており、今さら御縁の不思議さを感じております。

最近、自然ということ問われる場面がありまして、白神山地の管理計画について秋田県側の座長をやらされて、基本理念について話をしました。

今までは、人間が自然の方を見て守るとか、守らないとか言っていたけれど、今回は森林保護地域というだけでなく、世界遺産に指定されたのだから、白神山地そのものがどう考えているのか、どのようなことが

望ましいか、ということを考えねばなりません。人間の恣意的な考えで白神山地をどうしようということとは止めてほしいとい、ました。

結論としては、入林規制をするという事でトラブルもなく全員一致の結論でした。

今は、自然の側に立つてものを見るという時代にきました。先程、控室で元金沢大学学長の金子曾政先生が「百年後には、森林と人間の関係はどう変わっているのか」と話されました。先生がおっしゃりたいことは、やはり人間は自然を考えているけれど、自然の側から

考える時代になってきているということでしょうね。この会話は、私にとって最高の収穫でした。自然の側に立つてものを見るのが大事なのです。具体的には解りませんが、今の時期にあると実感しています。先般、「森の記憶」という本の書評を頼まれて読みました。

森林を喪失するということは、単に森の生態系を失うばかりでなく、文化の記憶を全部失うことであると書かれていました。森林には、文化、文明が全部投影しているということです。それを失うということは、「単なるもの」として失うのではなく、文

明の記憶を全部失うことの重大さを考えなければなりません。本当にその通りだと思いました。

巨樹に関しても、これが当てはまると思いますが。例えば、屋久島の縄文杉は縄文時代から人間の世界を見てきているということです。巨樹の中に文明の記憶が内包されているというすごさを考えますと、私達は巨樹の存在を疎かに出来ないものと思っています。

樹木、森林が単なる生態系として物の一つとして取り扱われる時代はもはや終わりました。広くいえば、文明、文化との関連で、人間生活の意義を問われる媒介物として存在を考える時にきていると思います。おろそかにしてはいけません。人間は、その尊大さをどうすればよいのか、どうしてよいか解かりません。謙虚に行動することです。人間は自然からものを得たり、恩恵を受けたりすることは許されることです。そうしなければ人は生きてゆけません。私達ができることは、自然に対して謙虚に生きるということに尽きるということであると思います。

石原 講演の最後にありましたように、自然をいたわろう、環境に優しくなどという言葉には、人間の驕りがあります。本当は、人は自然に謙

虚でなければならぬと改めて思い直しました。おわりに芦原さん 宜敷くお願いします。



巨樹と植生

芦原 昭和四十二年（一九六七）、文化庁は、天然記念物緊急調査を実施しました。本県では、里見先生を中心に十五、六人の調査委員会を作り、この調査を開始しました。

この結果、標高五〇〇㍉以下の現存植生図を短期間で完成することが出来ました。

このことが契機になりまして、二五〇〇年位前の植生（原植生）はどうなっていたかを調査することになりました。

環境破壊の様相や自然の保存、復元などを手がかりにして、過去の植生を推定する方法もあるでしょうが、今の神社の森に貴重な姿が残っているということから、県下の社叢林を根気よく調査することになりました。

神社の森は、古来より地域住民の信仰の対照として大切に保護されてきたものであります。神の降臨する場所として神聖化され、みだりに人の立ち入ることを許されなかったわ

けです。

例えば、羽咋市の気多大社の「入らずの森」は、明らかに神域として人の立ち入りが禁止されています。従って、過去の植生を考えるには、それぞれの地域の極相が重要であり

ます。

「点」の調査であるが、それをつなげば「線」となり、「面」となって植生が解るのではないかということとです。

神社を調べるにあたり、石川県神社庁の発行した『石川県神社誌』を基にしました。県下の神社数は約一九〇〇社余で、そのうち訪れたのは一、五七三社で、約八三％になりました。

植生調査は、自然林度という段階を設定し、(A)階層構造がしっかり見られ、面積が広く、良く維持されているもの。(B)面積が劣るが林相が良好なもの。(C)面積が狭く、林相に人為的なものが多く入ったもの。(D)全く社叢林として形態がなっていないものと区分して植生の組成表を作成しました。

C・Dのランクにも巨木と思われるものが多く残っていました。

植生調査を行った社叢は一、五七三社の内、一四八社で（九・四％）でありました。過疎地の神社跡にも足を運びました。そこには歴史を踏

またた巨樹が亭々と起立している姿に出会い、何んともいえぬ気持ちになったことを覚えています。木は何も語ってくれないが、黙って我々に語りかけているというのが実感でした。

このような調査の結果、原植生が推定されました。

低地の海岸より標高五〇㍉の平地の緩斜面の水位の高いところではタブ林（タブイノデ群集）、標高二〇〇㍉あたりまでの斜面、尾根部はスダジイ林（スダジイヤブコウジ群集）が発達していたと思われます。山間部の三〇〇㍉までの谷筋の急斜面では、ウラジロガシ林（ウラジロガシヒメアオキ群集）が発達していたと思われる。その他、人為的に二次林が生じ、土地条件によってケヤキ群集やモミ群集、アカマツ群集が発達していたことも考えられます。標高五〇〇㍉以上の温帯地域の代表的である夏緑広葉樹林（ブナ帯）、これは白山山麓などの標本からも考えられることです。

巨樹が存在することは、過去にその地域にその仲間の樹木が生育していたことを示すことであり、地域の住民が守り育てたことにより、現在まで生育することが出来たので、立派な文化遺産と考えてよいと思っています。

過去の建築物、遺跡などに目を奪

われがちですが、このような巨樹も文化的遺産と同じと見ても良いのではないかと思っています。

石原 石川県の原植生と新しい植栽はどうあるべきか、ということは大きな問題であります。都市緑化にあたっては、このことを念頭にして樹種の選定をしていただきたいものです。

四人の方々の第一回の発言が終わりました。質問がございましたら用紙に書いて箱に入れて下さい。最後に一括してお答えをさせていただきます。それでは、第二回目につづります。今までに言い足りなかったことなどお話し下さい。

松枝 子供達の自然教育について、とかく家の中でゲームなどして遊ぶことが多く、自然に触れることが少ない。小さい時から自然に触れさせ、自然大好き人間になるように、また、その中で自ら多くのものに興味を持ち、それが自然のメカニズムを知り、第一歩になるものと思います。

そして、優しさのある人、思いやりを持つことのできる人、偉大なる自然に対する付き合いのできる人になってほしいと考えています。

石原 教育問題がでしたが、ドイツの問題に詳しい先生を差し置いて話すのかもしれませんが、ドイツのカ-

ルスルーエでは、子供達を教育するには、まず先生を教育せねばならない。先生(文系、小学校教師)を対象にした自然教育が進んでいるのに感心した記憶があります。

北村 人間には、表と裏の部分があります。両方ともあるのが偽らざる人間の姿といえます。感心な部分と落ちこぼれ部分もあり、それが見え隠れしています。

この部分が教育面でも顕著に現れがちなところで、この部分を如何にするかが教育の問題点ではなからうかと思えます。

今は、主軸となる考えが見えにくい。それを救うものは自然しかないと考えています。自然に身を委ねることの意味を考えてみれば、これこそ私達の生きる道、自然を中心に考えることが将来の道ではなからうか。実際にそう思っています。

敬虔な気持を抱く、畏れの気持を大事にしていくことが大切です。

方法、道は多くあります。一度、自然の偉大さを見直して下さい。必ず、いつか答が見付けられることと思っています。

石原 ありがとうございます。

最後に芦原さん、お願い致します。芦原 神社等を回って感じたことは、駐車場が多くなったこと、巨木の伐採等でした。木々の傷ましい姿に胸

がうたれました。

外国では、自然に触れさせるため、幼児を連れた保母さん、家族連れが多く目につきました。

また、バスは排気ガスを押さえるため、停車するとエンジンを切るなど、自然を大切にしていました。

家々の窓には、ゼラニウムが飾られています。臭い匂いがするので虫が近寄ってきません。防虫剤も無用、美観的にも良い、一挙両得の工夫、これなど自然に対する優しさ、思いやりの表われかも知れません。限りある自然を大切にしていきたいと思っています。

石原 それでは、質問に移ります。

質問はあらかじめ配布された用紙に記入して提出していただきました。北村先生への質問が多いようですが、それぞれお答えしていただきます。

質問 土は過去に受けた応力を記憶していて、人間が手を加えると甦える。樹木にもそれがあるか。

答 例えば、アテのくるいは大工さんに嫌われる。こうした例は他にもある。良く乾燥させるなど、昔の人はそれらとうまくつき合っていました。

質問 街境の山林の都市民への開放

について

答 山林の開放は昔からいわれています。一方、所有者の利害と合わないところがあります。ドイツでもそうです。したがって一定のルールに基づき、限定的にならざるをえませんが、自然休養林、自然公園などがその例です。

質問 森の楽しみ方について

答 日本人はこういう方法があると概念的に理解しようとしています。しかし、各人のやり方で実行すれば良いのです。ハチや虫にさされることも貴重な体験です。

その他に「巨樹の病気と治療法」、「銘木の苗木の育成」、「環境ホルモンと樹木への害」、「巨樹と巨木の違い」、「国指定天然記念物の基準」などの質問がありました。専門的になりますので省略いたしました。

石原 四人のパネラーの方々、そして会場みなさんの協力により滞りなく会を終了することができました。石川県巨樹の会は発足して十年ですが、次の二十年に向けて頑張りましょう。

(まとめ文責・事務局)

十周年記念大会に寄せて

— 寄稿 —

日本銀行金沢支店長 片木 進

「磯の上の都万麻をみれば根を延えて、年深から神さびにけり。」日銀

金沢支店にある樹齢四五〇年のつまま(タブノキ)を見ると、この大伴家持の歌が偲ばれます。私達は何故巨樹・古木をみて深く感動するのでしょうか。理由のひとつはその生命力にあるように思います。日銀のタブノキも、幹は空洞で表皮のみで生きていますが、枝は連理となり、毎年千個からの実を結んでいます。

今ひとつの理由は「木に精霊が宿る。」と信じさせる何かがあるためではないでしょうか。此度の巨樹の会十周年記念講演会での北村先生の話を伺いそう思いました。先生によると「欧州では一神教としてのキリスト教は新興宗教に過ぎません。太古よりの精霊を崇める祭りは、それが多神教であっても現在も連綿として続いています」とのことでした。鎮守の杜の産土神は、古今東西を問わず宗教の枠を大きく超克しているのでしょうか。日銀のタブノキも私が話しかけるとしつかり答えてくれます。この木が江戸期から「し神木」

と呼ばれているのも、むべなるかなです。

そもそも日銀支店は明治四十二年に現在地に設置されましたが、私はご神木が呼び寄せてくれた気がしてなりません。それはこんな逸話です。当時、日銀は適地を必死に探していました。折しも当地に在った白山屋という旅館がボヤをおこしました。修築は簡単でしたが、日銀が土地を求めていることを知り、「この際お譲りしましょう」ということで、日銀が建設されたのです。ご神木は火の守り神として崇拜されていたので、火事が出たこと自体不思議です。私は、紙でできたお札を扱う日銀を、火災から守ってやろうと、木が意図的にボヤを起したに違いないと思っています。

この五月に巨樹の会のご配慮により、ご神木の苗を多くの方に配賦しました。私共は子孫が立派に育つと同時に、皆様に弥栄がもたらされることを希っています。

— 寄稿 —

山形大学生物環境学科 神田 リエ

石川県巨樹の会創立十周年おめでとうございます。当日は記念祝賀会にも参加させて頂き、多くの方と交流できましたことを心から感謝致しております。

頂きました「石川の巨樹・巨木林ガイド」は本当に大変なご努力の賜物と思っております。巨樹を訪ねるのは、その場所がわかっても、なかなかたどりつけない思いを幾度か経験したからです。

私の巨樹の旅は古い一冊の写真帳から始まりました。一九二三年に編纂された「山形県老樹名木写真帳」(山形県立村山農学校林学教室)に記載された山形県内各地の五九本の老樹・名木を訪ねてみることにしたのです。山形県内とはいえ、私の住む鶴岡市を拠点に各地をまわるのはとても時間のかかるものでした。杜寺の中にあれば割合探しやすいものの、山中にあつたり、また七十年余という年月の中で失われた巨樹・名木もたくさんあったからです。小雨降る中、標高二九六呎の古城山に登りました。山頂に城跡があり、そこに「延沢の大杉」があるのです。



曲川の大杉(トトロの木)

やっと登ってもうじきかなと思っていたら、「これより七曲り半」との標識、泣きたい思いでたどり着いたの覚えていています。厳しい雨で山道がなくなっていたこともありました。その後、たくさんの巨樹・名木に出会いました。「砂川の大イチョウ」はクリンソウの咲く中にありました。トトロの木といわれている「曲川の大杉」は黄金色に実った稲穂の中にあり、本当にトトロがたたずんでいるようでした。「津金沢の大スギ」を訪ねた時は秋で、見上げると傍らのイチョウから黄色の葉がまるで雪が舞い散るように降ってきました。「文殊様の夫婦杉」のあるところには、山門からずっと紫陽花の参道が続いていました。

こんなふうには巨樹との出会いは、巨樹をとりまく自然との出会いでもありました。できることなら巨樹に四季それぞれに出会いたいとも思うのです。その時々々の風や香りに包まれて、まわりの景色と一緒に巨樹と向かいあえたらと、そんな思いを抱きながら、時間を見つけては出かけていく今日この頃です。

不肖の会員

木戸睦彦

十周年大会に思う

宮本康一

十周年記念大会に出席してから四、五日経ったのでした。つい最近どこかで大きな樺の木を見たことを思い出しました。根元から枝分かれして天に向かって伸びた美しい姿ははつきり思い出せるのですが、それが何処だったのかどうしても思い出せないのです。しばらく考えて思わず笑ってしまいました。樺を見たのは夢だったので。夢を見てから目が覚めるまでかなりの時間があつたので、つい頭の中が混乱してしまつたようでした。巨樹の夢など初めてで、記念大会で多くのことを見聞きしたその印象が強く残っていたのでしょう。

植物にはそれほど関心のない私ですが、里見先生とは時々お会いしていましたし、樺という木だけは妙に好きでしたから、そんなことで「巨樹の会」にも入会しました。樺は地味な木ですが、堅くて力強く、すくすくと伸びて見上げるような木になります。新緑が美しく、秋の紅葉も派手ではないのですが美しいのです。しかも、伐れば見事な木目を見せてくれます。何か偉大な人物を見るようなところがあって、人間の生き方を教えてくれるような気がするのです。

す。そんなわけで私と樹木のかかわりあいは学術的ではなく、多分に情緒的なものでした。

「巨樹の会」に入会して約五年、「巨樹探訪の会」だけはかなりよく参加しました。しかし、情緒的人間ですから遠足気分なところがあり、よく勉強される会員の方々を見ては、ひそかに恥ずかしく思っていました。言ってみれば「不肖の会員」というところでは、それでも探訪参加を繰り返すうちに、少しずつ草木に関心が出てきました。そして、遂に巨樹の夢を見るまでになりました。「巨樹の会」がそこまで育ててくれたわけです。

私は数学を専門とする者ですが、数学の世界ではプロとアマの開きはかなりのものに見えます。言葉が強過ぎますが、本格的に勉強をしないかぎりアマはプロの近くには行けないように思えます。それでもアマの数学者は大切な存在ですし、アマはアマとして数学を楽しむことができます。「巨樹の会」の十周年にあたり「不肖の会員」の私ですが、樹木のアマとして会の発展を願っています。

(金沢大学名誉教授・金沢市)

会員となっても長い年月がたち、送られてくる会報、行事案内が人生の楽しみの一つとなっています。能登、加賀を問わず、各地で巨樹の保護、保全に尽力されている姿を目にするとき、自分が奥能登の柳田村に住むため、参加できないもどかしさを痛感いたします。当村に隣接する能都町には、県一位のアベマキもあります。折りをみて訪ねたいと思います。

我が柳田村盆友会は、今年五月上旬、金沢で四回目となるノトキリシマツツジ展を開き、巨樹の会からも多くの支援を得て盛会に終えることができました。その巨樹の会が晴れて十周年を迎えるとの通知をいただき、今回こそは出席をと懸命の思いで、私を含め二人の会員が参加した次第です。

北村昌美先生の基調講演では、よく話題にのぼる「地球にやさしい、環境にやさしい」という唄い文句は、守られているのは、実は人間の方だと考えさせられ、良い機会となりました。また、シンポジウムに参加されました四人のパネリストの中で紅一点の渡辺さんは、若い乍らも幼いころから木の温もりや香りに親しみ、

今でも全国各地の巨樹に触れる感動を大切にされる姿に感心しました。さて、さまざまな活動を行い多くの功績を残した巨樹の会ですが、これを後世に伝えることも各会員の大切な使命と考えます。それには何といても若年会員の育成、組織の強化を図ることが、会の活性化につながる大切なことと思います。そこで、活動に新たに取り入れる提案をいたします。

- 一、幼稚園児、小中学生を対象とした巨樹のスケッチコンクール。
 - 二、マツ、スギなどの樹木をテーマとした作文コンクール。
 - 三、一般対象の写真コンテスト。
 - 四、能登・加賀地区別に、兼六園、国定公園などに自生する樹木をテーマにした作文コンクール。
 - 五、マスコミ等と呼びかけ、我が町自慢の木と題したテーマで月一回の連載を五年にわたって企画してもらおう。
- 以上の活動等を継続することで、若い人への樹木に対する関心も高まり、会の発展につながるものと考えます。

(歯科医・柳田村)

十周年の活動を祝って

大野木 潤子

石川県巨樹の会が十周年を迎えられました事を心よりお慶び申し上げます。

平成元年四月、全国に先駆け結成された「石川県巨樹の会」は、県内の巨樹、巨木を保護、調査、育成する活動を続けてこられ、その間に「朝日森林文化賞」をも受賞して居られます。

メンバーの一人として何度か巨樹探訪会に同行しました、巨樹の前に立つと胸のふるえを感じるのです。白峰村、太田の大トチを見た時にもよくぞ、この険しい山の中で、多雪地帯で、一三〇〇年も生き長らえて来たものと、その生命力に驚かされました。感動をそのまま担当しているNHKの早朝ラジオのレポートに載せました。日本国中で三百万人の人が聴いて下さったとか、同じ内容で英訳されて全世界にも流れて行きました。ラジオを聴いて下さった方からのエールが相次ぎました。巨樹への関心の高さに驚いています。いつだったか本多の森に続く兼六園の椎の幹に耳を当てて、かつて戦の時にここに集った馬の蹄の音と軍靴の響を聞こうとした事もあった。私木は何十年も何百年も生きて、私

達には、人間の業を見つめさせてくれたように感じました。

又、一里野の白山へ続く加賀禅定道への途中、抱えきれない程の大きなブナの瘤だらけの幹に聴診器を当てて、幹の中を流れる水の「ゴォーッ、ゴォーッ」という音に唯々唸ったものです。巨樹には人を誘い寄せる魅力があるようです。

気多大社の三百年後の杜づくりにお手伝いした時のこと、潮風に傷んできた森を若木で護る為に、気象条件の合う日本海側の巨樹の種を拾い集め、播いて育てて、植え込む。何んと気持の入った作業だったことか。巨樹を見つめる事で、その地方の歴史が見えてくる。

クマタカが上空を舞う姿が見え、そのクマタカの生息地を守る為に入山を禁じた領主のお陰で白山麓に日本一のカツラの木が残っている。鳥や獣、茸や薬草や虫、微生物まで、一本の木を支え、支えられる生命の輝きに、心がときめくのを覚える。「木を守るのが我々の役目」。何と明快な石川県巨樹の会の言葉である。益々の活動を祈るばかりです。

(金沢市)

十周年行事担当奮戦記

北川 正司

平成元年四月二十三日に会員一十九名で産声をあげた石川県巨樹の会は今年で一〇年目を迎えました。

その節目を意義あるものにとの役員会の決議により、記念大会を催すことになりました。行事担当委員として、能谷清行、森本茂会員と私、そして事務局長の四名が選任され、この重責に当たることになりました。

平成九年五月より、月一回のペーパで事務局へ集まり打合せ等を行ってきました。以下、大会までの経緯を記述いたします。

○大会の柱立て

まずは、柱となる講演会には、『森林と日本人』の著者で、森の心を語られて御活躍中の山形大学名誉教授・北村昌美先生の内諾を得られたこと、パネラーには県内で活躍中の会員諸氏に決定したときは、これで柱立ては揃った。参加者には満足してもらえらるうと、自信をもって進めることが出来るようになりました。

○ガイド作成

百選を選定するに当たり、選定委員会が発足し、地区、樹種別配分等々考慮の上、新たに発見されたもの、花木なども再度取材されました。作

業の大半は事務局担当扱いになりました。校正段階では、ベースになった地図が特殊な目的に作成されたものであったので、不必要な地名、施設等の削除、探訪に必要な地名、道路等の記載等々の修正は思ったより大変な仕事だったと話を聞きました。

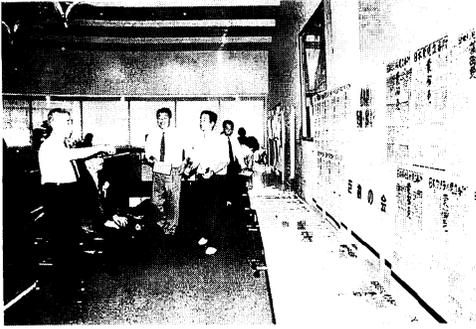
私自身、全国の巨樹巡りは随分やりましたが、このガイドに記載されたものは半分しか探訪しておりません。これから時間をかけて、ガイド片手に訪ねてみたいと思っています。

○参加者対策について

記念大会の当初目標は二〇〇名前後として出発しました。

会報十八号(一〇・二・一日発行)の誌上に申込み案内を記載し、会員一〇〇名以上をとの目標でいきました。同年三月、事務局に集まり各々の準備状況、会員の申込状況等の確認がありました。

会報発送後、一ヶ月が過ぎても申込は少なく、担当委員、役員、一部会員など約四十名にしかずませんでした。このため広くPRしようとして十団体近くの機関紙に掲載してもらいました。PRパンフレットも千枚位作り、各種団体へ配付したり公民館、図書館等の窓口へ置いたりして



開会前の展示準備中

大会開催は次第に上昇気流に乗りはじめたようでしたが、まだ全体像が見えてきません。最後の切札として、往復ハガキ作戦(会員)へと踏切りました。これは効果絶大で、五月末には一〇〇名を超え、六月中旬には、一般参加者も五〇名となり、最低ラインをクリアして、いよいよ準備にも熱が入ってきました。大会前日までの申込みは二一〇名を超えるまでになり、何時でもスタートできる体制になりました。

○ 展示のこだわり
今回の記念大会は、一般の方々にも本会の活動を広くアピールする目的をもっていました。講演会、パネルディスカッションはいうまでもなく、視覚的に巨樹というものを実感

して頂くために、写真の展示をいたしました。読売新聞社より寄贈された新日本名木百選と里見会長が永年取り組んでこられた全国巨樹見立番附の展示、会の業績褒賞として戴いた「朝日森林文化賞」「石川県文化、歴史、環境基金」の賞状、レリーフ等の御披露。十年間の歩みも表にまとめ一覽できるようにしました。その他、新しく見つかったり、当会で確認した「こもちカツラ」「天井壁のミズナラ」(白峰村)、全国一を誇る「太田の大トチ」の写真も展示することにになりました。

大会準備も、参加人数の見通しがついたところで一気に加速し、ボード、看板等の業者発注、それらは大会まで十日足らずに迫った六月十七日のことでした。

○ 本番一ヶ月前

六月に入り、毎週打合せを行いました。申込者も決り、パーティーも七三名の出席になりました。最終段階の受付、展示、大会進行、会場運営など細部にわたり検討しました。役員には、司令塔になる分刻みの時間表も渡しました。時間も限られているので電話、FAXでの打合せが頻繁に続きました。また、会場での録音、スライド、照明、ステージの昇降等の機器の操作は、山形大学のOBが受持ちました。

○ 大会当日

夜半からの雨足も朝方には上ったが、天気回復は未定、天候を気にしながらロビー展示、受付準備をしました。受付は会員・一般用に配付する書類、ガイドを用意し、奥様会員で準備万端で開始を待ちました。

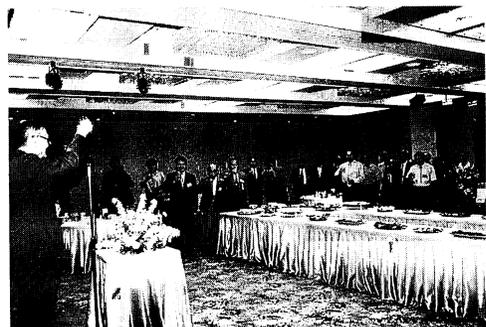
「本日はおめでとうございます」
会員の来場挨拶と青海万里子さんの司会で大会はスタート。

まず、平成十年度総会は、井幡副会長の議長で進行、次に講演会が始まりました。先生のお話には、時々笑声や拍手が聞え、大変良いムードでした。用意した二四〇席もほぼ満席、立見もでる盛況で満足感を味わいました。

パネルディスカッションでは、各パネリストの発表があり、つづいて質問は、北村先生に集中し、先生は専門分野以外の質問には閉口しながら「この場にいることを、今、つくづく後悔しています」との冗談に会場も和気藹々の雰囲気です。予定時間をオーバーしましたが、参加者には、それぞれの感銘が波及したような盛り上りの中で閉会になりました。

○ 記念パーティー

大会も盛況で終り、第二部も八〇名の参加者で隣接する会館ではじまりました。



記念パーティー

なごやかに会食もはじまり、テーブルスピーチ、また、新理事、パネリストもされた芦原孝治さんの軽妙な手品、遠路お祝にとお越し下されたひたち巨樹の会長川上千尋氏よりの声をからしてのエール。中業理事の石川県の自然を織り込んだ相撲甚句と宴もたけなわとなり、最後のお開きの挨拶後、元気でまた会いましょうと力強い声が混じり合い、素晴らしい大会でした。この感激は今も胸の内にあります。大会を皆様と一緒に準備に携わることが出来て大変楽しい思い出になりました。

最後に、記念大会、記念パーティーに御参加頂きました皆様、本当に有難うございました。

(会社員・金沢市)

石川県巨樹の会10年の歩み

年月日	活動	内容
H 1. 1.20	設立発起人会	県林業会館において協議 16名
H 1. 4.23	創立総会	白嶺会館にて110名の出席で会長、役員、規約、予算等承認。会員198名でスタート
H 1. 4.29	第1回探訪会	兼六園と本多の森、金沢城跡、県庁前堂形の権 延べ280名
H 1. 8. 1	巨樹いしかわ1号	石川県巨樹の会発足によせて。 国指定天然記念物
H 1. 9. 9	講演会	「巨樹と神木」白山比咩神社 太田宮司
H 1. 9.17	第2回探訪会	白峰村、日本一の太田の大トチ。60名参加
H 2. 2. 1	巨樹いしかわ2号	第3回巨木を語ろう全国フォーラムの開催に当り。 県指定天然記念物
H 2. 4.28	第3回全国フォーラム	巨木を語ろう全国フォーラムが加賀市で開催。主催：石川県、加賀市、本会、後援：環境庁、林野庁、森林文化協会
H 2. 4.29	第3回探訪会	Aコース 御仏供スギコース。82名が参加
H 2. 4.29	〃	Bコース 天覧(栢野)の大杉コース。64名参加
H 2. 5.15	活動に対する助成	TAKARAハーモニストファンドより本会の活動に対して助成金の下付。
H 2. 6. 9	講演、巨樹写真展	読売新聞社金沢支社と共催、里見会長講演、新・日本名木百選展。延べ264名入場
H 2. 8. 1	巨樹いしかわ3号	巨樹幻想。 珠洲市天然記念物
H 2.10.13	第4回探訪会	気多大社社叢入らずの森、県林木育種場等を探訪。40名参加
H 3. 2. 1	巨樹いしかわ4号	加賀・江沼の巨樹巨木林。 金沢市指定天然記念物・金沢市指定保存樹(林)
H 3. 5.19	第5回探訪会	能都町常椿寺の大藤、真脇遺跡、桜木神社のスギ等。41名参加
H 3. 8. 1	巨樹いしかわ5号	樹木の心材腐朽(病)と樹木の保護。 穴水町・能都町指定天然記念物
H 3. 9.22	第6回探訪会	鹿島町石動山の樹林と史跡を探訪。40名参加
H 3. 9.29	被害調査開始	台風19号の被害状況を調査。9/27~10/10にかけて県内各所
H 4. 2. 1	巨樹いしかわ6号	台風19号による樹木被害。 鹿島町天然記念物
H 4. 5.10	第7回探訪会	小松方面、大杉神社のイチョウ、五十谷の大スギ他を探訪。40名参加
H 4. 8. 1	巨樹いしかわ7号	古里巨樹名木など覚書②。 小松市指定天然記念物
H 4.10. 4	第8回探訪会	中能登、唐島自然林、小牧のシイ他を探訪。33名参加
H 5. 2. 1	巨樹いしかわ8号	はるかなる巨樹。 中島町・鳥屋町指定天然記念物
H 5. 5.23	第9回探訪会	白峰、別山、市ノ瀬の植物観察。55名参加
H 5. 8. 1	巨樹いしかわ9号	石川県巨樹の会5周年によせて。 尾口村、吉野谷村、鶴米町、河内村指定天然記念物
H 5.10. 3	第10回探訪会	珠洲市、山伏山の原生林、須須神社社叢、倒スギ探訪。28名参加
H 5.12.15	記念植樹	本会創立5周年記念植樹を石川県森林公園内で行う。17名参加
H 6. 2. 1	巨樹いしかわ10号	樹木の保護育成。 柳田村指定天然記念物
H 6. 5. 1	第11回探訪会	門前町、元祖アテ、総持寺、滝神社社叢他探訪。49名参加
H 6. 6. 7	巨樹調査	白峰村太田の大トチ調査。会長他3名
H 6. 8. 1	巨樹いしかわ11号	中西陽一前知事を偲ぶ。 門前町指定天然記念物
H 6.10. 2	第12回探訪会	永光寺、妙法輪寺のナンテン、弘願寺跡のハリギリ他探訪。41名参加
H 7. 1.18	表彰状	石川県文化、歴史、環境基金(理事長 谷本知事)より表彰状と奨励金の下付。
H 7. 2. 1	巨樹いしかわ12号	カツラの巨樹。 津幡町指定天然記念物
H 7. 5.14	第13回探訪会	富来町増穂浦、海士崎灯台(海浜植物観察)、高爪神社のタブ他探訪。40名参加
H 7. 5.28	巨樹調査	尾口村ヒノキ巨樹の調査。会長、樹木環境調査員総勢12名
H 7. 6.19	巨樹調査	富山県魚津市の洞杉巨木群と入善町の沢スギを調査。会長他5名
H 7. 8. 1	巨樹いしかわ13号	自然保護の常識について考える。 富来町指定天然記念物
H 7.10. 1	第14回探訪会	七尾市伊影山神社の大イチョウ、三室町のサイカチ他探訪。31名参加
H 8. 2. 1	巨樹いしかわ14号	古里巨樹名木など覚書(9)。 七尾市指定天然記念物
H 8. 5.11	巨樹調査	白峰村市ノ瀬で雪上登はんにて幻の大カツラ(こもちカツラ)を調査確認。5名
H 8. 5. 6	第15回探訪会	金沢市板ヶ谷の大杉、大乘寺樹林、鶴米町井口ケヤキ他探訪。48名参加
H 8. 8. 1	巨樹いしかわ15号	白峰村市ノ瀬カツラ調査記。 辰口町、寺井町、根上町指定天然記念物
H 8.10. 6	第16回探訪会	初の県外探訪会、福井白山神社の大カツラ、専福寺のケヤキ他。36名参加
H 8.11. 2	神木の杜植樹式	気多大社「神木の杜」にて、教育委員会(石川県、羽咋市)、本会10名参加
H 9. 2. 1	巨樹いしかわ16号	巨樹の形見。 松任市・野々市町指定天然記念物
H 9. 4.11	巨樹調査	富山県城端町、エドヒガンザクラ(全国2位)調査。会長他2名
H 9. 5. 4	巨樹調査	白峰村こもちカツラ調査(2回目)、石川TV取材。5名
H 9. 5.10	第17回探訪会	穴水町アテ林、能登中居鑄物館見学、植樹を行う。54名参加
H 9. 6.27	朝日森林文化賞受賞	第15回朝日森林文化賞受賞(全国4団体、1個人)、朝日新聞社本社にて受領
H 9. 8. 1	巨樹いしかわ17号	「石川県巨樹の会」の朝日森林文化賞を祝う。 羽咋市、鹿西町指定天然記念物
H 9.10. 5	第18回探訪会	県外2回目、富山県魚津洞スギ、埋没林、入善杉沢の沢スギ探訪。21名参加
H 9.10.10	巨樹調査	白峰村別当出合ミズナラ調査確認(県内最大)。井幡副会長他6名参加
H 10. 2. 1	巨樹いしかわ18号	日銀金沢支店のタブノキとお稲荷さん。 宇ノ気町・高松町・七塚町指定天然記念物
H 10. 5.10	第19回探訪会・植樹	輪島市三井アテ林、健康の森にて十周年記念植樹、伊勢神社大スギ他。45名参加
H 10. 6.28	10周年記念大会	本会創立10周年記念大会を金沢市本多町、エルフ金沢にて開催。240名参加
H 10. 6.28	第10回通常総会	会員数 一般 366名、法人 13団体、購読 16団体(10年3月31日現在)

※ 巨樹いしかわの内容は、1頁に掲載されたものの表題名のみ記入

イスノキの巨樹

里見 信生

国内の分布は本州南部(東海・南近畿・山陽)、四国、九州、琉球で、常緑広葉樹林に自生するが、しばしば社寺・庭園に栽植されていて、栽培の北限は太平洋側で東北地方(宮城県仙台市成実寺(二〇、一一))、日本海側で北陸地方(石川県輪島市名舟町(二二〇、一一))、金沢市安江八幡神社(二五〇、一五・一三〇、一一) 金沢市尾山神社(二三〇、一一) あたり

附表は全国に知られるイスノキの巨樹を列記したものであるが、幹周三〇〇センチ以上の樹は全国に六一本あり、これを地方別に見ると、九州四八本、本州一〇本、四国三本となる。なかでも九州では鹿児島県と宮崎県に計三七本存在し、この数は全体の六割をしめるのは特徴的である。

和名のイスノキの語源は材を加工し、櫛を作ることからクシノキと呼ばれ、それがイスノキに転化したようである。また、別名ヒヨノキはモンゼンイスアブラムシが葉につくった虫糞(下図)を子供達は笛に使用し、「ひょう、ひょう」と吹き鳴らすことから生じたと言われる。



全国順位	所在地	幹周(㎝)	樹高(㎞)	備考
1	鹿児島県吉松町川添国有林	五〇二	二七	
2	上屋久町愛子岳北東	五〇二	二五	
3	宮崎県南郷村上渡川	四九〇	二〇	
4	鹿児島県瀧辺町 熊野神社 (1)	四六〇	二七	
5	高知県三原村亀ノ川	四四〇	一七	
6	宮崎県高原町御池	四四〇	一九	
7	長崎県小値賀町野崎 (1)	四一〇	二〇	
8	宮崎県西都町 長谷観音	四一〇	二五	
9	えびの市西川北	三九〇	二二	
10	静岡県下田市 吉佐美八幡神社	三九〇	一五	国指定天然記念物
11	福岡県古賀町藤野	三九〇	一五	県指定天然記念物
12	愛媛県松山市泉町	三九〇	九	市指定天然記念物
13	鹿児島県上屋久町瀬初川中流 (1)	三八二	二〇	
14	金峰町金峰山 (1)	三八〇	二〇	
15	金峰町金峰山 (2)	三八〇	二〇	

全国順位	所在地	幹周(㎝)	樹高(㎞)	備考
16	鹿児島県内之浦町 稲尾神社 (1)	三七七	一七	
17	長崎県小値賀町野崎 (2)	三七〇	一五	
18	熊本県坂本村下鎌瀬	三六三	一六	
19	三重県鳥羽市河内町 庫蔵寺	三六一	一一	
20	鹿児島県金峰町金峰山 (2)	三六〇	一五	
21	熊本県坂本村辻	三六〇	一一	
22	宮崎県西都町 尾八重神社 (1)	三五〇	二五	
23	南郷町虚久蔵島	三五〇	一一	
24	西都町 尾八重神社 (2)	三五〇	一七	
25	鹿児島県屋久町花山歩道 (1)	三五〇	一四	
26	静岡県森町宮代 小国神社	三五〇	一一	町指定天然記念物
27	宮崎県綾町竹野	三五〇	一一	
28	鹿児島県内之浦町 稲尾神社 (2)	三四五	一五	
29	屋久町小楊子川流域 (1)	三四四	一一	
30	山口県下関市 忌宮神社	三四〇	二五	
31	宮崎県西都町 尾八重神社 (3)	三四〇	二二	
32	東京都港区赤坂御用地	三四〇	九	
33	熊本県苓北町小松宇土	三三八	一八	
34	鹿児島県蒲生町城山公園	三三五	二〇	
35	愛知県豊橋市豊橋公園	三三五	一〇	
36	鹿児島県瀧辺町 熊野神社 (2)	三三〇	二八	
37	宮崎県西都町 尾八重神社 (4)	三三〇	一八	
38	山口県萩市明神池	三三〇	一五	
39	鹿児島県屋久町花山歩道 (2)	三二八	二〇	
40	鹿児島県屋久町小楊子川流域 (2)	三二八	一五	
41	瀧辺町 熊野神社 (3)	三二〇	二五	
42	宮崎県宮崎市 今泉神社	三二〇	一一	
43	鹿児島県上屋久町瀬初川中流 (3)	三二〇	二〇	
44	愛媛県津島町上積	三二〇	一五	
45	鹿児島県内之浦町 稲尾神社 (3)	三二〇	一一	
46	金峰町金峰山 (3)	三一〇	一八	
47	宮崎県南郷町榎原	三一〇	一七	
48	津久見町 立磐神社	三〇八	一九	
49	東京都千代田区 皇居	三〇五	一六	
50	長崎県国見町川原田	三〇五	一五	
51	宮崎県綾町千尋	三〇五	一三	
52	茨城県旭村勝下新田	三〇四	一七	
53	鹿児島県瀧辺町 熊野神社 (4)	三〇〇	二五	
54	大分県鶴見町地松浦	三〇〇	二〇	
55	鹿児島県根占町木場岳	三〇〇	一九	
56	大分県杵築市二ノ坂区	三〇〇	一五	
57	長崎県小値賀町野崎 (3)	三〇〇	一五	
58	鹿児島県東市来町宮田石	三〇〇	一四	
59	鹿児島県加茂町岩倉	三〇〇	一四	
60	鹿児島県上屋久町白谷雲水峽	三〇〇	一一	
61	大分県津久見市谷川	三〇〇	一一	

古里巨樹名木など覚書

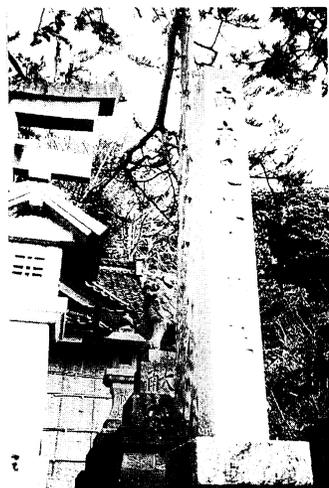
(14)

赤井重恭

十二、住吉の二本松

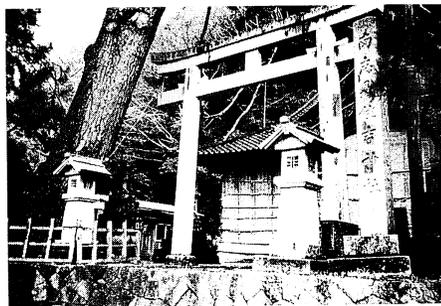
輪島市里町は能登半島の北部、日本海へ注ぐ南志見川の河口に位置し、その地名の由来は、往古、里村と小田屋村の西村を南志見と称し、南志見里と言われていたが、後に略して里と呼んだものと言われている(能登志徴)(前記「里の與兵衛家の椎樹」参照)。南志見の地名の由来は、「和名抄」の鳳至郡男心郷(平安朝期に見える郷名)によると言い、鳳至郡大屋庄南志見村は鎌倉期から見える村名である。建久八年(一一九七)七月九日付の地頭長谷部信連禁制案(西光寺文書)に「大屋御庄南志見村」と見え、村内の西光寺内における殺生・樹木伐採を禁じている。

西光寺文書にはほかにも長谷部信連関係文書があり、南志見村についての記述はあるが、用語などに疑義があり、真偽は定かでない。確実な初見史料は承久三年(一一二二)九月六日付の能登國田数注文で、「大屋庄内東保 卅三町五段 加南志見村定」と見える(鎌遺二八二八)。東保に隣接する未開地を鎌倉初期に新たに開発して南志見村が成立したのであろう。室町期と推定される年月日未詳の崇徳院御影堂領目録には、「能登國大屋庄十ヶ村」として三井保・穴水村・山田村・光浦・深見保・内浦・鳳至院・西保(号河原田)・東保・南志見村があげられており、南志見村は崇徳院御影堂領大屋庄十ヶ村の一村であったことが知られる(華頂要略八三)。



(図12-1) 里町 南志見住吉神社 (昭和62年(1987)3月12日)

南志見村は崇徳院御影堂領大屋庄十ヶ村の一村であったことが知られる(華頂要略八三)。



(図12-3) 里町 南志見住吉神社 「住吉の二本松」の一つ (鳥居の左側の松) 2本の内の1本は枯れてしまった (昭和62年(1987)3月12日)

井口当谷城(主、脱落力)奉仕尊敬靈宝也」と見える井口当谷城主は、当宝也」と見える井口当谷城主は、当時の南志見の領主と見られる。一方、「永享以来御番帳」に「長南志見孫太郎」の名が見え、このころ南



(図12-2) 里町 南志見住吉神社 祭神 表筒男命 中筒男命 底筒男命 神功皇后 応神天皇 大國主命 (昭和62年(1987)3月12日)

志見と称する長氏の存在が知られる。したがって、井口氏も大屋庄地頭長(長谷部)氏の庶流であろう。「能登名跡志」にも南志見の城主井口氏」と見え、南志見村は長氏庶流井口氏の本領とすることができると言える。戦国期、天正五年(一五七七)十一月十六日付の上杉謙知行宛行状では、能登に入った上杉謙信が、酒井左近分であった南志見本郷五谷を鳥倉泰明に宛行っている(志賀文書)。南志見の地名は江戸期には南志見郷として存続している(角川地名)。

鳳至郡里村は江戸期から明治二十二年(一八八九)に至る村名であるが、同二十二年南志見村の大字となり、昭和二十九年(一九五四)輪島市里町となる。因に、世帯数は九三、人口は三六一である(角川地名)。

里町に鎮座する南志見住吉神社(旧村社)(図十二-1、-2)は創祀年代は不詳であるが、表筒男命、中筒男命、底筒男命の住吉三神及び神功皇后、応神天皇、大國主命を祀り、もと住吉大明神と称して、往古から里、小田屋、尊利地、忍、東山の五ヶ村の惣社であり、崇敬を集めてきた。もと東山の亀の平と言う丘の上にあったが、のち現

在地に遷座したと伝えられており、江戸期には祭礼当日は藩命により製塩作業を停止させたと言われている(鳳至郡誌)。明治四年(一八七二)社号を南志見住吉神社と改め、村社に列格した(南志見学制百年、縣神社誌)。明治四十年(一九〇七)八幡神社と出雲神社を合祀した。



(図12-3) 里町 南志見住吉神社
「住吉の二本松」

樹の周囲を約1.5m離れて円く石で囲み、更にその外側を、樹から2~3m離れて五角に木柵をめぐらしてある

(昭和62年(1987)3月12日)



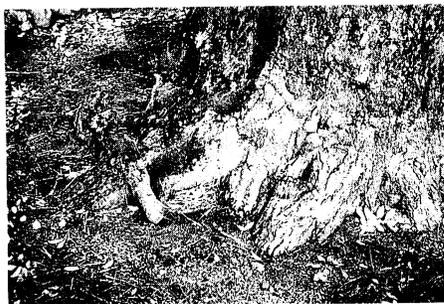
(図12-4) 里町 南志見住吉神社
「住吉の二本松」の一つ(左)石垣からの松は「二本松」の一つではない。
(昭和62年(1987)3月12日)

「住吉の二本松」と呼んでいる(図十二一三、四)。樹高は約二四呎、幹周は四・四呎、根際の幹周は六呎に及ぶ巨樹であって、推定樹齢は五百年とも、六百年に及ぶとも言われており、石川縣内の黒松では第一の巨樹である(石川縣の巨樹)。輪島市は昭和三十三年(一九五八)六月十一日、これを市天然記念物に指定し、

樹の周りを約一・五呎離れて円く石で囲み、その外側に更に、樹から二呎ばかり離れて五角に木柵をめぐらして保護している(図十二一五)。「加能老

神社の境内は三八〇坪、約一二五〇平方呎で(縣神社誌)、鳥居の横には昔から「住吉の二本松」或は「住吉の夫婦松」と呼ばれている姿のよい黒松の巨樹がある。神木として、又名木として愛されてきたが、惜しいことに一本は枯死して、現在は一本だけであるが、人々は今でも

樹名木誌」に、此の樹は、「枝葉蟠屈して境内を蔽へり」とあるように、以前はよく繁茂して枝葉を境内に拡げていたようである。しかし、現在(昭和六十二年)では枝葉の着生状況はやや悪く、葉には黒松の剛直さが少ないように思われ、衰弱の方向にあるように思われた(図十二一六)。又、剪除した太い枝の痕は巻き込みが悪く、心材部が露呈したまま残っており(図十二一六)、材質腐朽菌のよい侵入門戸を提供しているようである。尚、根の露出部には可成りの傷があり(図十二一七)、樹幹には、松の瘤病(一種の銹病)とは異なる、表面の複雑な瘤がある(図十二一六)。以上のように、この樹には一応の保護処地が施されているようであるが、その後の手入れが不十分



(図12-7) 里町 南志見住吉神社
「住吉の二本松」の根部、可成り傷がある
(昭和62年(1987)3月12日)

であるように思われ、遺憾である。尚、今のところカイメンタケなど、材質腐朽菌の侵害を受けていないようであるが、今後これらに就いて是非関心を持って見守ってほしい。
(京大名誉教授 金沢市)



(図12-6) 里町 南志見住吉神社

樹高 約二四呎 幹周 四・四呎
樹幹に生じた瘤状突起と殆んど巻き込んでいない枝痕

(昭和62年(1987)3月12日)

巨樹探訪

輪島市の巨樹を訪ねて

中島 康雄

アカシヤの白い花と新緑を車窓にながめながら「巨樹に思いをはせた一行を乗せて、バスは能登海浜道路を輪島市をめざして走る。うす紫色の「キリ」の花、広げた枝の先端を新緑に輝かせている「トガ」が車窓に見え始める。濃緑色の樹冠の表面が渦を巻いているように、鮮やかな黄金色に光っている「アテ」が木々に混じってくると、能登にきた実感が湧く。

最初の訪問地は、輪島市三井町中の広大なアテ林である。土地の指導林家の石下哲雄さんが四十年かけて植林し、ようやく陽の目を見る時期がきたものであるという。濃緑色と黄金色に光り輝くコントラスト。壮大なアテの林を、どう写真に写そうか、期待に胸がおどる。

しかし現地へついて茫然とした。殆どの木が伐られて、斜面に倒れているのではないか。能登空港の予定地であるという。なんとも無残としかいいようがない。とかく人間は現在のことしか考えない。ましてそれが経済のこととなると、拍車がかかる。地球に生息する全生物は、お互い

に関連しあって、地球の環境が保たれている。最近の研究によれば「アミーバから人間まで、全生物は同じ遺伝子(DNA)の暗号を持っている」という。その暗号はA(アデニン)、T(チミン)、C(シトニン)、G(グアニン)の四つの組合せしかないという。地球上の生物は全て兄弟ということになる。



伐採されたアテ林

たしかに開発は必要であろう。経済的には十年程先のことを考えて計画、実行する。しかし今、私達は子孫のことを念頭において、少なくとも百年、二百年先を考えて物事を行わなければならない時にきている。経済開発を最優先するというアテ林の伐採は、人間の驕りではないと、つくづく思う。

無残に倒されたアテ林の中で、石下さんの話を聞く。

「私の五歳のときに、父がアカマツが自生していた山に、アテの植林を始めた。四十年で最初のアテ材を供給し、以後十五年の間隔で供給を続ける計画であった。ようやく実現のめどがついた時に、空港の話が出てきた。親子が血のにじむように苦心して育てたアテ林を皆伐するのは、猛反対であったが、一人が反対してもただ混乱をまねくだけなので、涙を飲んで同意した。しかし実際に切り倒される時には「公共のため」と心に割り切っていたが、子供を殺される気持ちであった。ここで植林(次世代を育てる方法)について説明を受けた。『伏条更新』といって、親木の下枝を押し上げて幹より一桁ほど離して土に埋め、

枝打ちした枝で押さえて上にその葉をかけて置く方法をとった。アテの性質や環境を読み取り、子供を育てるように気を使った」という。

失われたものが大き過ぎて意気の揚がらない中で、次の目的地三井町洲衛の、「健康の森」へ向かう。「健康の森」で石川県巨樹の会発足十年の記念植樹を行う。光栄にも植樹者の一人に選ばれて、「諏訪神社の大ケヤキ」の苗を無事育つように念じて植える。

ウグイスの声を聞きながら、初夏の柔らかな日差しのもとで、三々五々昼食をとる。

昼食後、石川県伊勢神社奥殿、右脇にそそり立つ石川県指定天然記念物「神明の大スギ」をみる。樹齢四五〇年余りという。ちなみに五一〇年前は、一向一揆により富樫政親が滅ぼされ、四四五年前は、上杉謙信と武田信玄の「川中島の決戦」が行われた年である。人間の一代を三〇年とすると、この神木は十五代程からの先祖の有様をつぶさに見つめてきたことになる。

このスギの下で、真心をこめて拍手を打つと、梢から「おう」と聞こえるときは願い事が神に通じたと言われている。何人かが試みたが残念ながら無言であった。

四方に枝を広げた様は、弁慶が七

つ道具を背負ったように荒々しいが、木の肌は若々しく見える。先年の台風では葉を多く落としたというが、若芽を出した枝もあり、全体として樹勢が弱り傷々しい気がする。巨樹は気象変動にも自分を守る術を心得ている。

拝殿の左前に五本に分岐した「ヒサカキ」の巨樹がある。丈は低い幹はびっくりする程太い。アテ林のショックが少し癒される。

途中に横地町の木下昭栄会員宅の樹齢四五〇年という「這いイチイ」の巨樹を見学する。庭木として綺麗に手入れされていた。

車はめずらしく波の静かな外浦海岸を一路赤崎町のキリシマツツジを目指す。車中では外浦海岸の生活・風習についての解説もあった。

このツツジは文献によれば、後亀山天皇の御代に、小坂家の先祖久左衛門が日向の国から持ってきたものといわれている。とすれば樹齢は六〇〇年をこえている。花期は既に終わっているとされるが、心が弾む。樹木のうっそうと茂った小道をたどると屋敷跡にでる。一瞬目を疑う。柵で囲ってあるツツジの大株が二株綺麗に抜き去られている。「なんで」「誰が?」「盗まれたのか?」驚愕の聲が飛ぶ。先のアテ林と同じく失望のため息が皆の口から漏れた。一週

間前に下見したときは、深紅の花が満開で、見事であったという。しかしよく見ると、掘り跡が綺麗に均されているので、恐らく持ち主が掘りあげたのだろう。天然記念物に指定されていないので仕方が無いとしても、残念であった。嘉永六年四月十日に前田齊泰侯がこの地を巡行した折りに観賞したという「御腰懸石」もあり、残っている三つの大株はぜひ残しておいてほしいものだ。このほか屋敷跡にはヤブツバキの原木が数本見られた。ツツジとともに花の時期は、さぞ壮観であろう。帰りの道筋で、里見会長からマムシグサの雄株・雌株の見分け方を教わる。

「能登志徴」巻六の「桶滝」の項に、『大沢より十五町山中往來の傍に、桶滝とて岩上に大きな穴ありて、その中より滝下る。下まで五段に下る滝なりし故に、殊に見事なり』と記してある。

滝までの整備された山道を下ると、轟音が聞こえてくる。吹き上げる冷気が体を包み、すがすがしい。巨岩に急流がぶつかり、渦が河床に穴を穿ち、滝となったもので、周囲三メートルの穴から、奔流となって岩床に流れ落ちる様は壯観である。桶の底が抜けたよう、的確な名称だと感心する。水は霧となり、岩肌、植物を濡らす。滝は霊力が強いといわれるが、飛沫を浴びると厳肅な気分になる。左脇に小さい祠があり、石造りの不動明王を祀ってあった。



桶滝の轟音

チクランやユキノシタの可憐な花が目に見える。優しい。

大沢町・上大沢町の海岸添いの民家にしつらえてある間垣は、独特の景観をつくる。冬の季節風を防ぐ先

人知恵である。山道に入り、県指定名勝「男女滝」を車窓より眺め、巨樹探訪は無事に終わり帰路につく。

巨樹に接し、自然に身をおくと、命の大切さをひしひしと感じる。とくに巨樹は、私達の何倍もの年月を生きてきている。何代にもわたっての先祖の生きざまを見ている。

私の家にも、祖々父の植えた十数本のシラカシの原木がある。裾には鳥が種子を運んできた雑木と、数十本のツバキが生えている。春は落葉を掃くのが日課になっており愚痴がでるが、伐ることはできない。秋には「どんぐり」が籠を敷いたようになり、子供たちが袋一杯に拾って行く。「ウグイス」を始め、年中小鳥がさえづり夏は涼しい。木の葉が落ちて汚いとか、虫がつく等と簡単に伐ってしまう風潮にあるが、私にはそれできない。

巨樹探訪を終えて、人間の欲望を目のあたりに見、改めて生きものの大切さを、子供たちに伝えなければならぬと痛感する。

最後になりましたが、いつも巨樹探訪のお世話と、貴重な出会いをつくっていただく巨樹の会の関係者の皆様に感謝いたします。

(野々市町)

巨樹探訪

探訪会に参加して

清水睦子

里見会長のご挨拶どおり良い天候に恵まれた一日、久し振りに友達を誘って探訪会に参加させていただきました。思えば、白峰村の「太田の大トチ」を見に誘われて以来やみつきとなり、都合のつく限り参加させていただいています。

里見会長の、草花の名や植生に関するお話も楽しく、色々なことを聞かせていただけるのです。とは言っても専門的なことは何にもわからず、そして覚えられず、ただハイキングのつもりで参加し申し訳ない様な状態です。せめて木の名前でも思いますがなかなかです。でも、大きな木や珍しい木の話が新聞テレビ等で取り上げられると興味を持って見ることが出来、楽しみがずいぶん増えました。

そんな訳で今回も楽しみに参加させていただきました。

おだやかな春の海を左に能登路に入り、まず三井町のアテ山の入口に立った時、声が出ませんでした。伐採されたばかりの山の現場をはじめて見たことでもあり、あの台風十九

号の時のたくさんの倒木を見た時よりショックが大きかったです。奥へ進むと増々ハゲ山、伐り倒されたアテやスギを目の前にして、将来能登空港が出来るためと聞かされても、自分の持山でもないのに胸にせまるものがありました。長期間にわたる育林作業そして工夫を凝らして植林されたアテ山の結果がもうすぐ見えるという頃になって伐られるのはどんな気持ちでしょう。空港が完成する迄だけの山が伐り開かれるのでしょうか。でも、能登の活性化のた

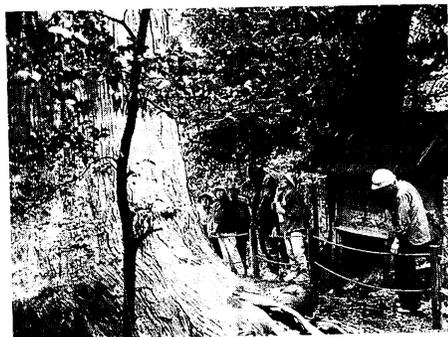


健康の森で植樹

めにはやはり必要なのでしょうね。東京、名古屋便のジャンボ機やプロペラ機だけでなく、海難救助機や山林見まわり等の家用機も飛ぶという夢でも見ましょ。

次に行った「健康の森」の一面に、巨樹の会が各地の巨樹、名木の種から育てた苗木を十周年記念事業として植樹、「十周年の杜」としました。新聞等によればこの健康の森には、「野鳥の森」「山野草の森」、アテ材利用の交流センター等も出来るとか、家族連れでゆっくり過ごせる森林閑施施設として整備されるようです。

この健康の森でたっぷり陽光を浴びての昼食のあと、輪島市石休町町の県指定天然記念物（昭和五十年指定）となっている「神明の大スギ」のある伊勢神社に行きました。うっそうと茂った杉の枝葉、根っ子が社殿を持ち上げるのではと思うほど太く、長く伸びており、台風十九号で折れたという枝の切り口でさえその大きいこと、幹の太さがわかるというものです。推定樹齢六〇〇年と言われているとのこと。願い事をして樹上から「応」と答があればそれがかなうと信じられてきたとか、早速私も願い事をしました。（……）又、社殿前には大きなヒサカキもあり、いずれも御神木として近郷近在の人々が大事に守り育ててこられた



伊勢神社の大杉

んだなと感じられました。

次に赤崎町のキリシマツツジを見るために海岸より少し山手に入りました。二株ばかり掘り起こされてお花も盛りを過ぎていたのは少し残念でした。五月はじめには五株そろって満開だったとのこと、その昔、前田齊泰公能登巡見の折にご覧になったと伝えられ一隅に「嘉永六年四月御腰掛所」と表示がありました。昔も今も変わらず見事な花だったのでしよう。掘り起こした時に切り捨てたと思われ枝を拾ってきて挿木してみました。根付きますかどうか？

探訪会も終りに近づいてきました。能登の中でも秘境と言われる鶴入や大沢を通っての帰り道、道端に「桶滝」の標示がありました。林道を少し入るとゴウゴウと響く滝の音、そ

指定	名称	所在地	指定	名称	所在地
国	天神社の大スギ	新潟県妙高高原町	国	松之山のケヤキ	新潟県松之山町
県	伊勢神社の大スギ	石川県輪島市	国	鶴川神社のケヤキ	新潟県金沢市
県	倒杉	珠洲市	市保	神明宮のケヤキ	石川県金沢市
国	羽黒山の爺杉	山形県羽黒町	国	八代の大ケヤキ	兵庫県朝来町
国	熊野神社の大スギ	鶴岡市	県	諏訪神社の大ケヤキ	新潟県上越市
国	將軍杉	新潟県三川村	国	堂形のシイ	石川県金沢市
国	上日寺のイチヨウ	富山県水見市		横谷県有林のブナ	新潟県津幡町
県	真光寺のイチヨウ	新潟県糸魚川市	県	金劔宮のウラジロガシ	新潟県津幡町
国	日置のハダカガヤ	兵庫県篠山町	県	甲斐崎神社のアカガシ	新潟県津幡町
国	文下 <small>（つくだ）</small> のケヤキ	山形県鶴岡市	国	野神の大センダン	徳島県阿波町

石川県巨樹の会十周年記念の杜

本会設立の十周年を記念して植栽した記念の杜です。苗木は、郷土に適した巨樹となるように願って、日本海側に育っている有名な巨樹の種苗を植栽しました。

の名の示すとおり底の抜けた桶から水が流れ落ちているような滝で、昭和三十一年石川県名勝として指定されたそうです。道端に立って見上げると岩穴から丸くドォーッと水が落ちている感じで、その流れ落ちた水は三段の滝となっても見事なものでした。

心地良い疲れに帰りの車中はウトウトし、あっと言う間に金沢に着き楽しい一日は終わりました。これからも自分なりに自然環境に関心を持ち続け、大きな木は次の世代にも大きいままで、今回植樹した木々も何年かしてうっそうとした森となって残ってほしいものです。次回又、皆様とご一緒出来ることを楽しみにしています。
(公務員・金沢市)

秋季巨樹探訪会のお知らせ

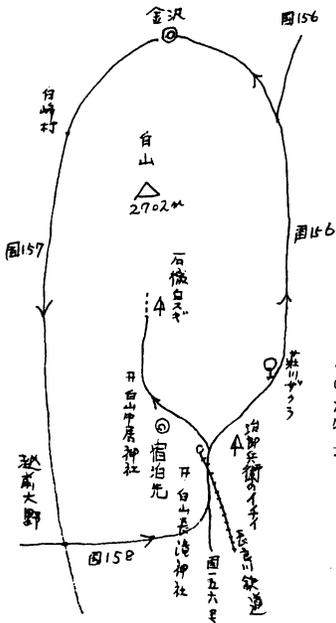
期日 十月三日(土)～四日(日)一泊二日
場所 石徹白のスギ・奥美濃路(岐阜県)
行程 ◆一日目 金沢(八時)↓白山長滝神社(岐阜県・白鳥町)↓阿弥陀ヶ滝↓石徹白のスギ↓白山中居神社(岐・白鳥町)↓宿舎⇨カルヴィイラいとしろ
(郡上郡白鳥町石徹白、☎〇五七五―一八六―一三七〇〇) 宿舎↓治郎兵衛のイチイ↓莊川桜↓白川郷合掌集落(世界遺産)↓金沢(一七時着予定) 八時までに県庁裏に集合(一日目の昼食持参) 二万二千元(バス利用) 会員外・二万四千元。 県外のためバス利用を原則といたします。 参加希望者はハガキ、又はFAXに住所・氏名を記載し、九月十日(土)までに事務局へ申込んで下さい。なお、申込済の方も再確認のため御一報下さい。

○石徹白のスギ

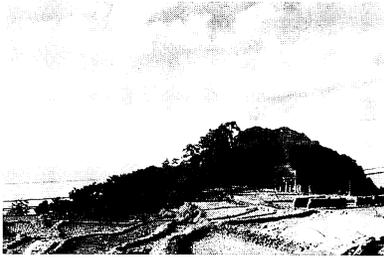
大正十三年十二月九日 国指定
昭和三十三年七月二日 特別国指定
場所 岐阜県郡上郡白鳥町石徹白
幹周一四・五尺 樹高二五・〇尺
白山の登山道海拔千尺付近の今清水神社跡に生育する日本の代表的なスギである。

○治郎兵衛のイチイ

平成六年一月二十五日 国指定
岐阜県大野郡莊川村惣則
胸高周囲七・九五尺 樹高一五・〇尺
平成元年(一九八九)の環境庁の調査で第一位の幹周をもつイチイ(雄株)とされ、数本が幹から枝が叢生しているのが特長。



石川県指定天然記念物



○榎原北代比古神社社叢タブ林
平成三年十月四日指定
輪島市深見町
(所有者又は管理者) 榎原北代比古神社



○伊勢神社の大スギ
昭和五十年七月二十一日指定
輪島市石休場町
(所有者又は管理者) 伊勢神社
幹周 七・二m、樹高三〇・〇m

輪島市指定天然記念物



○八幡神社の大スギ
昭和四十四年七月十一日指定
輪島市町野町広江
(所有者又は管理者) 八幡神社
幹周 五・一m、樹高三五・〇m



○与兵衛のシイ
昭和四十四年七月十一日指定
輪島市里町
(所有者又は管理者) 藤田達也
幹周 五・八、五・四m(2岐)、樹高一八・〇m



○住吉の二本松
昭和三十三年六月十一日指定
輪島市里町
(所有者又は管理者) 南志見住吉神社
幹周 四・四m、樹高二四・〇m



○井池家ヒイラギ・モチノキ
昭和五十九年十二月二十四日指定
輪島市町野町金蔵(所有者又は管理者) 井池光夫
ヒイラギ 幹周 二・七、一・五(2岐)m、樹高一・〇m
モチノキ 幹周 三・四m、樹高一八・〇m



○キクザクラ
昭和四十四年七月十一日指定
輪島市二俣町
(所有者又は管理者) 西地正顕
幹周 一・二m、樹高一〇・〇m



○町野神社の大スギ
昭和四十四年七月十一日指定
輪島市町野町栗蔵
(所有者又は管理者) 町野神社
幹周 六・〇m、樹高三二・〇m



○白山神社の大ケヤキ
昭和五十九年十二月二十四日指定
輪島市尊利地町
(所有者又は管理者) 尊利地町区長
幹周 四・七㍎、樹高 二五・〇㍎



○六郎谷のヤマザクラ
昭和五十九年十二月二十四日指定
輪島市里町
(所有者又は管理者) 里町区長
幹周 四・七㍎、樹高 一〇・〇㍎



○北野家のモチノキ
昭和五十九年十二月二十四日指定
輪島市忍町
(所有者又は管理者) 北野善五郎
幹周 三・六㍎、樹高 一八・〇㍎



○モウソウキンメイイチク群生
平成七年十月二十五日指定
輪島市縄又町
(所有者又は管理者) 松野清五郎



○高洲山のブナ林
昭和五十九年十二月二十四日指定
輪島市大野町
(所有者又は管理者) 高洲神社



○名船寺のイスノキ
昭和五十九年十二月二十四日指定
輪島市名舟町
(所有者又は管理者) 名舟町区長
幹周 二・一㍎、樹高 一二・〇㍎

○松尾家のヒサカキ
昭和五十九年十二月二十四日指定
輪島市町野町伏戸
(所有者又は管理者) 松尾進馬
幹周 一・六㍎、樹高 七・〇㍎

○池田の森
昭和五十九年十二月二十四日指定
輪島市町野町東大野
(所有者又は管理者) 池田周二

○やしろ様のタブノキ
昭和五十八年六月二十八日指定
輪島市軸倉島
(所有者又は管理者) 奥津姫神社

○寺山のブナ原生林
昭和四十九年四月二十六日指定
輪島市町野町寺山
(所有者又は管理者) 石川県

○キクザクラ
昭和四十四年七月十一日指定
輪島市二俣町
(所有者又は管理者) 鍛冶次三郎
幹周 〇・九㍎、樹高 五・二㍎

○キコク

昭和四十四年七月十一日指定

輪島市二俣町

(所有者又は管理者) 鍛冶次三郎
幹周 〇・九㍎、樹高 五・二㍎

○日和山のモクゲンジ
昭和五十九年十二月二十四日指定
輪島市輪島崎町
(所有者又は管理者) 輪島前神社

○中山家のイチイ
昭和五十九年十二月二十四日指定
輪島市深見町
(所有者又は管理者) 中山弘一
幹周 二・二㍎、樹高 八・〇㍎

○金蔵寺古木群
昭和五十九年十二月二十四日指定
輪島市町野町金蔵
(所有者又は管理者) 金蔵寺

○慶願寺古木群
昭和五十九年十二月二十四日指定
輪島市町野町金蔵
(所有者又は管理者) 慶願寺

○専照寺古木群
昭和五十九年十二月二十四日指定
輪島市縄又町
(所有者又は管理者) 専照寺

巨樹だより

受賞された方々 五月二十二日に金子曾政氏、寺田喜久雄氏が第二十一回、石川テレビ賞を受賞された。生物多様性シンポジウム・イン石川 一月二十四日 環境庁自然保護局主催で講演会とシンポジウムが行われた。

モミの木は残った 鶴来町本町の道路拡張に伴い伐採が心配された約二百五十年生のモミの木が、地元会員達の努力で残される事に決った。金沢市保存樹の指定 市景観審議会は、専念寺のイチョウ(粟ヶ崎町)諏訪八幡神社のクロマツ(福増町)を保存樹に指定した。

鎮守の森の保全計画 金沢市は鎮守の森を保全する社叢林管理計画の策定に乗り出した。過疎化や都市化で自然の生態系が変化する恐れがあることから貴重な対策として期待されている。(一・一九北国)

県指定天然記念物のライコウジキクザクラを救おう 最近、急激に衰弱してきたため、県林試はパイオによる増殖を、県穴水森林部では空中取り木による増殖に取組んでいる。(四・二四北国)

巨樹、巨木林ガイドと巨樹見立審附を配布 県内各市町村の四四の図書館へガイド二部、審附表(ヒノキ、シイノキなど)九種類を県立図書館

を通じて寄贈。

ガイド贈呈 巨樹・巨木林ガイドに掲載の所有者、管理者等に保護普及のため二部ずつ送付。後継木の苗木譲渡について スゲジイ、スギ等の四〜五年生ポット苗が若干ありますので御希望の方は御連絡下さい。無償ですが県緑化センター等に取りに行く必要があります。

第九回シンポジウム「里山の自然と人々の営み」について「自然史博を実現する会では、九月六日、津幡町・県森林公園で計画していますので希望者は当所へ御連絡下さい。また、旧埋蔵文化財センターが自然史資料施設となりましたので、我々との関係が深まるものと期待しています。

森づくりボランティア活動のお知らせ 県緑化推進委員会では、植樹、枝打、間伐、きのこ森づくり等を県内十一ヶ所、次の日程で計画していますので参加希望者は☎〇七六一二四二一五〇五〇へ問い合わせ申込んで下さい。

各地に出来た巨樹の会 本会では県単位として一番先に出来た会であるが、全国巨樹・巨木林の会名簿をみると少しずつ輪が広がってきた。ビッグ・ツリー青森(青森市)、ひたち巨樹の会(日立市)、群馬県倉淵村巨樹の会(群馬県倉淵村)、

巨樹に親しむ会(東京都中野区)、巨樹の会(東京都奥多摩町)、静岡県巨樹の会(静岡県函南町)、岐阜県巨樹・古木の会(岐阜市)、グリーンあすなら(奈良市)、香川巨樹の会(香川県香南町)、村田町名木を守る会(宮城県村田町)、また、昨年十月にくまもと巨樹の会(熊本市)ができた。

木霊(こだま)百号を製本 当会と交流しているひたち巨樹の会では、機関誌百号を記念し製本版を作製した。

第一一回巨木を語ろう全国フォーラム 十月十六〜十七日、世界自然遺産・白神山麓の秋田県藤里町総合開発センターで開催されることになりました。第一日目、総会九時二十分より、フォーラム十二時よりです。第二日目はA、B二コースでブナ林体験をします。

なお十八、十九日と近畿日本ツーリストが組んだコースもあります。お問い合わせは、藤里町役場企画振興課 ☎〇一八五一七九一二一一一内線一六三 FAX〇一八五一七九一二一一六番へ。

計 報 今回の総会で理事に選任された芦原孝治氏(六八才)は、永い間、高校の生物学の教師として又、里見会長とチームを組んで石川県の原植生を研究してこられた方で、これから

の活躍が期待されていきました。今回の大会ではパネラーをつとめられ、又、パーティでは見事な手品を披露されるなど北陸マジシャンクラブの会長もしておられました。大会後中国へ旅行され、万里の長城付近での植林ボランティアに参加されました。が上海の宿舎で急逝されました。ここに謹んで哀悼申し上げます。

石川県巨樹の会日誌

1月4〜7日 巨樹・巨木林ガイド(以下、ガイド)企画編集 1月15日 ガイド協議

会長、事務局 1月22〜24日 会報校正 事務局 1月26日 秋季巨樹探訪会の岐阜県白鳥町宿泊所予約 事務局 1月31日 会行事について打合せ 会長、事務局

2月2〜4日 会報第18号発送 2月6〜8日 中部グリーンボランティア技能指導者研修(静岡県森林公園)に津幡茂会員が参加 2月16日 輪島市周辺の樹木診断 立花樹木医

2月17日 ガイド原案校閲のため 各選定委員に発送 事務局 2月27日 ガイド作成のため巨樹巨木林百選原稿、同カラー写真三一五枚等を橋本印刷へ提供 事務局

3月3日 スギ、スタジイ苗をポットより出し、湯涌苗圃に床替

3月4日 県緑化センターで健康の森へ植栽予定の苗木調査 事務局
 3月6日 十周年事業の一環として、巨樹見立番付の横綱、大関に位置する巨樹を有する全国三九市町村へ送付 事務局

3月15日 北国新聞一〇五周年記念紙に石川の自然を掲載するため企画部長取材のため来所 事務局
 3月18日 県緑化センターで健康の森(輪島市)・気多大社への苗木荷造り準備

3月21日 地球温暖化防止について考える講演会に出席 田中
 3月22日 県緑化センターより記念苗木を健康の森に運搬 正田、田中

4月1日 会計整理 事務局
 4月8日 春季巨樹探訪会(輪島市西部) 予定地と十周年記念の杜植栽地調査 里見、能谷、田中

5月12日 十周年記念行事打合せ 能谷、北川、田中
 5月15日 中島町小牧、白山神社のスタジイ並びに高松町八幡神社のツバキの保護診断 立花、田中

5月16日 十周年記念行事打合せ 能谷、北川、田中
 4月22日 山梨巨樹の会を設立したいと後藤氏外二名来所。 田中

4月25日 ガイドの文章、写真等の調整作業 会長、南氏、田中
 4月30日 会計監査 濱野、岸合

森多監事 事務局
 5月1日 湯涌苗圃で床替と除草
 5月6日 気多大社で神木の杜植栽苗と標示板確認

5月7日 十周年記念行事の進捗状況説明 県自然保護課、事務局
 5月10日 第19回春季巨樹探訪会(輪島市西部)と十周年記念の杜植樹(健康の森) 会長外四七名参加
 5月12日 いしかわ環境パートナーシップ県民会議に出席 田中

5月16日 十周年記念行事打合せ 能谷、北川、森本、田中
 5月17日 県文化財パトロールで森本町、往還のクロマツ、二俣町、本泉寺のサワラ調査 田中

5月18日 総会資料作成 事務局
 5月20日 県庁記者クラブへ十周年記念大会ビラを配布 事務局
 5月21日 ガイドの校正 事務局

5月22日 会員へ往復ハガキ発送
 5月25日 日銀金沢支店で片木支店長よりタブ苗の配布
 5月30日 十周年記念行事打合せ(総会八〇名、大会一〇二名、パティー五七名出席の返事があり一同安堵) 能谷、北川、森本、田中

6月2日 ガイド地図訂正 事務局
 6月4日 決算予算の内容、ガイド等の状況協議 会長、井幡、田中

6月5日 県知事、環境部、農林水産部、議事事務局等へ十周年記念大会の招待状を持参 井幡、田中
 6月13日 十周年記念行事打合せ 能谷、北川、森本、田中

6月16日 北国新聞記者よりガイドと十周年記念行事の取材 事務局
 6月21日 十周年記念行事打合せ 能谷、北川、事務局
 6月27日 十周年記念行事打合せ 能谷、北川、森本、事務局

6月28日 役員11時集合、総会13時開会(九五名)、十周年大会13時50分開会(二四〇名)、パティー(八〇名) 17時30分開演、19時30分無事閉会
 7月1日 北陸中日新聞記者よりガイドの取材 里見、田中
 7月3日 湯涌苗圃の除草 事務局
 7月4日 会報の記事を数名の方に依頼連絡 事務局
 7月6より9日 ガイド第一回送付と配付(輪島方面) 事務局
 7月13日 芦原孝治理事の葬儀 会長、田中

7月14より15日 県内公共図書館四十四ヶ所へ、ガイド各二部、巨樹見立番附各一部(九種類)を贈呈 事務局
 7月15日 石川郡方面へ調査とガイド配付 事務局
 7月16より17日 大会テープおこし

7月18より20日 大会シンポジウム原稿チェック 石原、田中
 7月21日 原稿提出 事務局
 7月22日 原稿編集 事務局
 7月23日 原稿編集 事務局
 7月24日 原稿編集 事務局
 7月25日 会員、関係団体へ会報送付準備 事務局

7月26日 十周年行事、秋季探訪等原稿打合せ 能谷、北川、田中
 7月27日 原稿調整 事務局
 7月28日 原稿打合 会計決算用
 7月29日 原稿打合 会長、田中
 7月30日 表紙写真、原稿最終チェック 事務局

◆平成九年度収支決算
 ◇収入合計四百二十九万五千七百六十九円(会費百二十六万六千円、事業収入三十一万八千円、その他収入二百三十九万五千二百九十四円、繰越金五十五万六千四百七十五円)
 ◇支出合計三百四十八万八千九百八十八円(事務費六十七万六千四百四十三円、事業費二百七十三万一千七百五十五円) 十年度へ繰越金八十八万七千五百七十一円。

◇平成十年度事業計画
 (1)講演会、シンポジウム各一回
 (2)会誌を年二回(八月、二月)巨樹・

巨木ガイド作成(3)巨樹探訪会 春秋
二回実施・春に十周年記念の杜植樹
(健康の森内) (4)諸調査指導

◆平成10年度収支予算

◇収支合計三百四十八万九千円(会費
費一百五十万円、事業収入八十三万九
千円、その他収入七十一万二千四百
二十九円、繰越金八十八万七千五百
七十一円)

◇支出合計三百四十八万九千円(事
務費七十三万四千二百二十九円、事業費
二百三十六万四千円、予備費三十九
万四千五百七十一円)

◆平成10年度役員

会長 里見信生 名誉会長 谷本

正憲 副会長 井幡清生、石原周次

常務理事 田中敏之(事務局)

理事 中栄義威、今井久元、美馬

秀夫、中村喜彰、古池博、村上貢、

能谷清行、式部隆介

監事 濱野一郎(代表)、岸合隆、

森多幸夫

専門委員 自然環境 美馬秀夫、

米山競一、池田良幸 樹木環境 北

川正司、立花武志、中川茂、中堀宏

昭、長谷川義法、疋田国博、松枝章、

向本敏覚、木材 三林進

地区委員 立花武志(小松地区)

山口一男(石川地区) 濱野一郎・津

幡茂(金沢地区) 疋田国博(羽咋地

区) 間明弘光(七尾地区) 石下哲雄、

中栄義威、内浦栄松(輪島鳳至地区)

政谷徳治(珠洲地区)

巨樹の会の図書一覧表 ③

書名	編・著者名	発行年月日	発行所	ページ数
原色日本の林相	㈩日本林業技術協会	H. 8. 4.25	地球出版株式会社	193 (大判)
日本の巨木	八木下弘	S.54.12.20	中央公論社	190 (大判)
香川の巨木	豊田基・北条令子	H. 7.11	香川県環境自然保護課	46
写真集 茨城の松	ひたち巨樹の会	H. 4. 7. 5	ひたち巨樹の会	80
岩手の名木・巨木	高村尚武、岩淵公二	H. 9. 9.10	岩手日報社	144
白山の人と自然「植物篇」	石川県白山自然保護センター	H. 4. 3.25	石川県白山自然保護センター	145
〃 「自然観察篇」	〃	〃	〃	127
〃 「地学篇」	〃	〃	〃	182
石川きのご隠鑑	池田良幸	H. 8. 7.15	北国新聞社出版局	255
三重の巨樹・巨林	三重県農林水産部林業事務局	H. 3. 3		18
いしかわの森林50選	石川の森50選編集委員会	H. 8. 3	㈩石川の森づくり推進委員会	113
巨樹紀行	芦田裕文		㈩家の光協会	173
巨樹と樹齢	渡辺新一郎	H. 8.12.25 (第2刷)	新風社	299
木の100不思議	㈩日本林業技術協会	H. 7. 2.15	東京書籍株式会社	217
土の100不思議	〃	H. 6. 3.24 (第6刷)	〃	217
石川県林業史	石川県林業史編さん委員会	H. 9. 3.31	石川県山林協会	879
森林と日本人	北村昌美	H. 7.12. 1	小学館	413
野に遊ぶ	川崎順二	H. 9. 3.31		227
グリーンパワー	森林文化協会	H.10. 8. 1号まで	㈩森林文化協会	事務局に通巻保存
森へ行く	高田 宏(寄贈)	H. 8. 7.27	㈱マインドカルチャーセンター	229
あした晴れたら森へ行こう	平岡忠夫(寄贈)	H. 9. 7	株式会社リヨン社	229
木 霊(こだま)	ひたち巨樹の会(寄贈)	H.10. 5.31	ひたち巨樹の会	225
ブナの森と生きる	北村昌美	H.10. 6. 4	PHP研究所	200
縄文杉	天野正幸	H.10. 4.22	丸善名古屋出版サービスセンター	44

(備考) 上記の巨樹・巨林に関する図書、会員の著書等が集まりましたので御利用下さい。
御申込は事務局までお願いします。(但し、郵送の場合は各自負担とします。)

編集後記

創立以来十年を迎えることが出来
ました。会員皆様の御協力に感謝の
ほかございません。

今回は記念特集号として増頁いた
しました。御投稿をいただきました
各執筆者の方々に感謝申し上げます。

さて、大会は成功だったと評価
していますが、次の点を反芻してい
ます。一つは、自然環境問題への関
心の高いこと。一つは、会員との対
話(例えば講演会やシンポ)の場を
考えること。一つは体制の若がいり
等です。以上については検討してい
きたいと思いますが、色々と制約が
ありますので、当面、関係団体の類
型事業と協力して進めたいと思っ
ていますので御了承頂きたいと思っ
ています。今後ともよろしく御願
い申し上げます。

会費	一般会員	年	三千元
購読料	法人会員	年	一万円
	一口	年	五千元

巨樹いしかわ第十九号
平成十年八月一日発行
金沢市兼六元町十一番二十八号
(田中 敏之方)

石川県巨樹の会
電話 〇七六―三三一―〇五六―
FAX 〇七六―三三一―〇五六―
郵便振替口座 〇〇三〇―三三三三三